

京都府埋蔵文化財情報

第104号

京都府出土のベトナム陶磁器	伊野 近富	1
遺跡抄報 時塚遺跡第17次の発掘調査	岡崎 研一	7
平成19年度発掘調査略報		11
1. 宮津城跡第14次	2. 史跡及び名勝笠置山	
3. 室橋遺跡第11次	4. 難波野遺跡第6次	
5. 長岡京跡右京第909次		
トピックス 寛治五年銘の木簡・舞鶴市中山近世墓の錫杖		20
普及啓発事業		22
遺跡でたどる京都の歴史 縄文時代の京都		28
府内遺跡紹介 110. 芝ヶ原古墳		36
長岡京跡調査だより・100		38
センターの動向		40

2007年11月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

京都府出土のベトナム陶磁器

伊野 近富

はじめに

今回紹介するベトナム陶磁器は、平安京左京内膳町跡と史跡および名勝笠置山の発掘調査で出土したものである。調査報告をした時点では、ベトナム陶磁器とはわからず、前者は産地不明陶磁器、後者は中国南部産かと報告したものであるが、この小文で訂正すると共に出土した意味を考察したい。

1. ベトナム陶磁器とは

ベトナム陶磁器については、ここ20年ほどで出土例が増えている^{注1}。それは、日本貿易陶磁研究会が積極的に啓発した賜物である。最初はベトナムを含む東南アジアに目を向けたものである。また、1990年に町田市立博物館で開催された「インドシナ半島の陶磁器―山田義雄氏寄贈コレクション―」展も、人々に東南アジア陶磁器の存在を啓発した点で重要な役割を担った。初期の研究成果としては、1991年に森村健一氏が沈船「WITTE LEEUW」号の陶磁器を紹介し、特にタイ・ノイ川窯系四耳壺を紹介した。さらに、1991～1993年に森本朝子氏ら^{注2}が中心となってベトナムで調査がなされ、「縄簾」が北部ベトナムであると断定した。

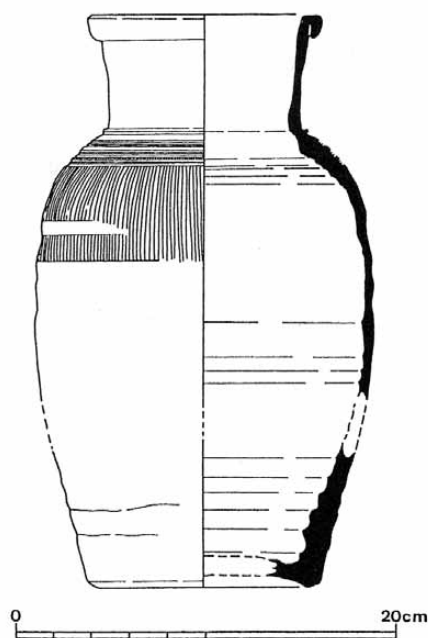
その後、堺環濠都市遺跡・大坂城跡・長崎・博多など貿易を推し進めた地域での出土例が増大している。

京都では、1997年に能芝 勉氏が「京都市内出土の東南アジア陶磁について―柳馬場通竹屋町出土のベトナム陶磁を中心に―」と題して31点の東南アジア陶磁器について紹介した。この内、ベトナム陶磁器は左京二条四坊出土(竹屋町)が13点、ほか4点である。この中に、今回報告する平安京左京内膳町跡出土例も紹介されている。

2. 平安京左京内膳町跡出土例^{注4}

平安京左京内膳町跡は、現在平安会館となっている。住所は上京区烏丸中立売り通西入ルである。平安時代は、平安京左京北辺坊で、諸司厨町の一つである内膳町となっていた。内膳とは朝廷での食事を掌る役所で、内膳町とはそこへ出仕する人々が住んだ町のことである。中世には東隣に御所があったため、「禁裏六丁」と呼ばれる上京の有力町人が住む町であった。江戸時代初期には「松屋三郎右衛門」という糸割符商人の屋敷が構えられており、いずれの時期を取り上げても、有力者が住む町であった。

今回紹介するのは、焼き締め長胴瓶1点である。これが出土したのは、調査地の西部で、室町



第1図 内膳町のベトナム焼締陶器

この商人が住む屋敷で使用された陶磁器の中に、ベトナム陶磁器があったのである。

第1図がこの製品である。この製品の焼成具合は陶器と磁器の間で拓器と分類されるが、本稿では焼締陶器という用語を使用する。^{注5}本品は口縁部から体部上半の破片と、底部を含めた体部下半の破片から復元したもので、口径12.2cm、推定される器高は約30cmである。形態は長胴の体部に円筒形の口縁部を付けたものである。口縁端部は小さな玉縁で、これは粘土端を外側に丸めて成形したものである。体部下半はややすぼまり、底部はほぼ平底だが中央部がやや上げ底となる。口縁部はナデ調整、体部上半は縦方向の細かなハケ目を施す。体部と頸部との境は横方向の突帯文を削り出して成形している。その下の肩部には3本1単位の平行沈線を3条巡らす。体部下半はナデ調整。底部外面は不調整である。口頸部内面はナデ調整。体部下半はロクロ目が顕著である。色調は外面茶褐色、内面も茶褐色だがやや灰色である。断面は外側が灰褐色で内側が茶褐色である。胎土は粘り気があり緻密で、白色粘土が細く縞状に入っている。

この長胴壺は、体部上半に「縄簾文」と呼ばれる縦方向の櫛目を密に施すことを特徴としている。同形式の壺はベトナム北部で生産されたことが明らかとなっている。^{注2}

3. 史跡及び名勝笠置山出土例^{注6}

史跡及び名勝笠置山は、京都府相楽郡笠置町大字笠置に所在する(第2図)。京都府の南東部に位置し、山々に囲まれた中に東から西へ木津川が流れている。その川に南から半島状に張り出した形の山塊が笠置山である。

標高288mの山頂には笠置寺があり、巨大な磨崖仏が古代から信仰の対象となっている。平安

通から東へ40mほど入った地点の土坑82である。

土坑82は、調査トレンチの南壁に接しており、東西4m、南北1m以上、深さ2m以上であった。埋土は焼け土で、炭化層と土砂の互層になっていた。この中に、多量の陶磁器が埋没していた。種類は土師器皿、同焙烙鍋、瓦器秉燭、ミニチュア釜、美濃の椀・皿・天目茶椀・鉢、唐津皿・深椀、瓶、丹波盤・播鉢、中国製白磁・青磁・青花磁器椀・皿・産地不明鉢・壺などである。時期は17世紀前半のものが主体で、埋め土の焼土から埋没時期は1661年の大火に伴うものと考えられる。

さて、この土坑の西10mの地点に土坑42がある。この出土品の中には「慶長九年」(1603)「松屋三郎右衛門」「糸・」という墨書された付け札があり、糸割符商人がこの住人であることが判明した。糸割符とは江戸幕府が慶長

時代には枕草子に「寺は笠置」と讃えられていた。しかし、寺としては小規模であったようで、中興を迎えたのは、解脱上人と呼ばれた興福寺僧貞慶(じょうけい)が平安時代末期から鎌倉時代初期に笠置寺に入ってからである。その後、貞慶を慕って東大寺僧宗性(そうしょう)が鎌倉中期に入山して、いっそう寺は整備された。この勢威を借りて鎌倉時代末期に倒幕を試みた後醍醐天皇は笠置山に立てこもり、元弘の乱(1331)が勃発した。

一ヶ月の戦いの後、『太平記』にいう笠置山城は陥落した。

その後、戦国時代には山城国の守護代であった木沢氏が城を築いた。笠置寺の寺域の中に築かれたらしい。この地は、京都、奈良、三重、大阪を結ぶ交通の要衝地として、戦略上重要な地点であった。

このような、戦国時代の末期から江戸時代初期頃と思われる土層の中から、ベトナム陶磁器が出土した。

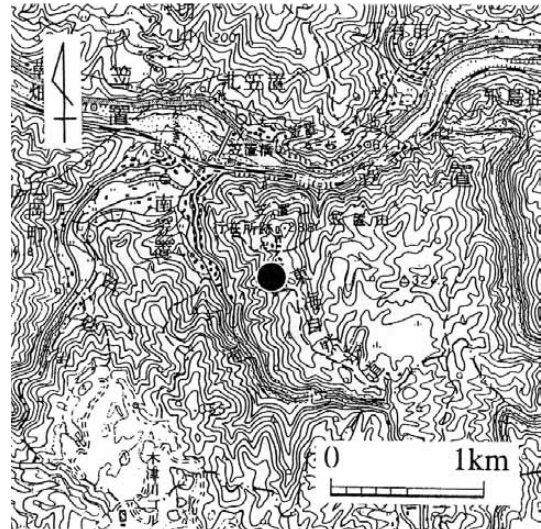
第15トレンチがこの陶磁器が出土したトレンチである。このトレンチは現笠置寺本堂より一段下がった西側丘陵よりさらに西に張り出した幅8mの狭い尾根に設定された。調査の結果、中世に建物が1～2棟あったことが判明した。おそらく僧坊と思われる。件の陶磁器は、尾根に堆積した中世の僧坊を被う遺物包含層から出土した。

第3図がこの製品であるが、焼締陶器壺の体部上半と思われる。頭部より上は欠損しており、口縁部形態は不明である。破片は縦8cm、横6cmで、復元すると体部上半の径は20.8cmである。断面は灰色である。胎土には白色砂を含む。緻密ではあるが、内膳町例のような粘り気はない。縦方向にレンズ状の亀裂(空気泡)あり。外面はナデ調整、内面はロクロナデが明瞭に残る。プロポーションは堺環濠都市遺跡出土のようなものと思われる。体部には文様はなく、これはベトナム中部産のタイプである。^{注7}

なお、もう1点整理作業中に見つけた破片がある。第15トレンチ中段中央の表土から60cmまでの遺物包含層から出土した。小破片で縦4cm、横4cmの胴部片である。内外面は茶褐色、断面は灰色で、前述したのと同様のプロポーションをもつ焼締陶器壺の体部上半と思われる。

さて、1600年前後の笠置山がどうであったか判断する史料はない。しかし、かろうじてその前後の史料が残っている。以下に羅列してみよう。

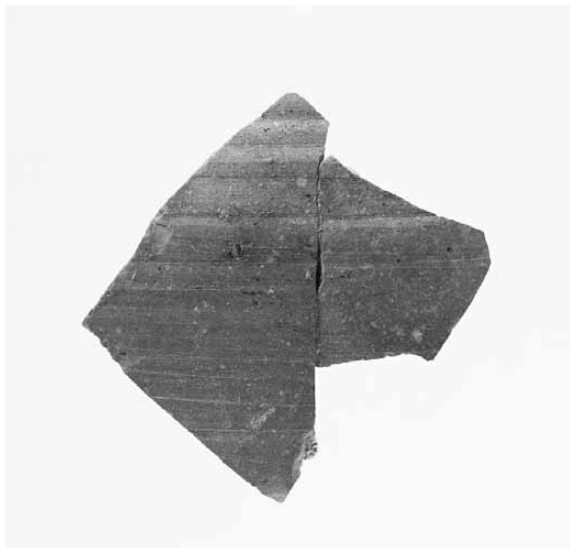
まず、先の山城国守護代木沢長政が活躍した頃まで遡ろう。天文10年(1541)11月26日朝、伊賀者が笠置城



第2図 調査地位置図
(国土地理院 1/50,000 奈良)



第3図 笠置山出土のベトナム焼締陶器



第4図 笠置山出土のベトナム焼締陶器

に忍び込み坊舎に放火した。しかし、甲賀者であった城にいた木沢勢によって退散させられている(『多聞院日記』)。肝心の木沢長政は翌年畠山・三好の軍勢によって討たれてしまい、その後、笠置城がどうなったのかは、記録に残っていない。

天正3年(1575)5月には奈良の僧たちが笠置山名物のツツジを見るために来山している。天正9年(1581)には隣国の伊賀盆地で大規模な戦いがあり、この地もその影響があったかもしれない。文禄元年(1592)には笠置寺を含む南笠置村一帯で検地が行われたらしい。元和5年(1619)に伊勢を治めていた藤堂高虎に山城国相楽郡、大和国添上郡などが与えられており、笠置の地も藤堂藩の支配地となった。それ以前の笠置寺は、京都所司代の直轄となっていた。^{注8}

さて、発掘調査で判明した1600年前後の調査地はどうであったのだろう。ベトナム陶磁器が出土した第15トレンチでは、小規模な僧坊があったこと、その時期の土師器皿・唐津皿が出土したが、それと共に犬型土製品が1点出土したことが注目される。安土・桃山期、大阪での発掘調査事例では1600年前後に集中するこの製品は、使用方法は不分明だが、その愛くるしい形から、子供の愛玩用とも考えられている。特に、大阪城で多く出土するのが特徴である。

さて、今回紹介したのと同種のベトナム陶磁器壺は大阪で多く出土している。大坂城(歴史的名称として坂を使用)Ⅱ期(1598～1615年)からあり、同Ⅲ期(1615～1622年)を経て、同Ⅳ期(1622～1650年頃)が多いとのことである。^{注9}

笠置山での出土状況を見ると、伊万里焼とは共伴せず、唐津焼が出土したことから大坂城Ⅱ期と同時期の可能性がある。先ほど紹介した犬型土製品及び土師器皿の形式を加味すれば、16世紀第Ⅳ四半期から大阪夏の陣の1615年までに相当すると考えられる。藤堂藩が笠置寺を含む相楽郡を知行し始めるのは1619年からであり、藤堂藩の産物とは考えられない。現段階の推測としては、これらの遺物が笠置寺の僧坊の一つで使用されたか、安土桃山期から江戸時代初期にかけての動乱期に城として使用した武将のものと考えている。

いずれにしても、笠置山(笠置寺あるいは笠置城)が単独で存在していたのではなく、京都・大

阪・三重・奈良を結ぶ地点に位置するという地理的事情が政治的や文化・経済的事情と深く関係していたことがわかる。

4. ベトナム陶磁器の存在意義

今回紹介したベトナムの焼き締め陶器は、どのような事情で生産され、日本にもたらされてきたのだろう。ベトナムの歴史を振り返ろう。^{注10}

1527年に興った莫朝(1527～1592年)は、国家の安定と統一を維持することはできなかったが、経済政策とりわけ商工業に関して開かれた政策が採られ、陶磁器産業は多様な形で発展した。

その後、1582年鄭松は莫氏を打ち破り、以前あった黎朝を再興した。しかし、結局のところ、ベトナム北部は鄭氏、中南部ベトナムは阮氏(黎朝の重臣)の勢力範囲で、この状態は18世紀後半まで続いた。岩生成一氏によれば、1592年から1598年までの間は、薩摩港のみ朱印状が発行された3隻の船がベトナムに向かった。徳川幕府の朱印船は、発行された356の朱印状のうち実に130がベトナムにやって来る船に対してであった。これは、スペインやポルトガルが進出した他の東南アジア地域を避けた結果でもある。許可書を取得した船主には有馬晴信等の大名、角倉了以、茶屋四郎次郎らの有力商人たちがいた。各船には約100～300人が乗り、その中には中国人、ポルトガル人、オランダ人、英国人等の外国人水先案内人や通訳も含まれていた。ベトナムにもたらされた商品は銅、鉄、硬貨、傘等であり、入手したものは生糸、絹、アロエ、カンフル、黒砂糖、胡椒、蜂蜜、鮫皮などであった。日本にもたらされたベトナム陶磁器は中国製の陶磁器とは違い、上記の商品を入れた器であった可能性が高い。なぜなら、中国製品は椀、皿、鉢が主体であるのに、ベトナム製品は壺であるからである。物を入れるための製品と考えても良い形なのである。^{注11}

なお、森村健一氏は、長胴壺は固体である砂糖を入れた物と考えている。理由は蓋と思われるものとセットとした場合、液体では外へこぼれるというものである。しかし、現代の酒でも口を密閉するやり方は植物や布を使えばできるので、最大の根拠とはいえない。また、扇浦正義氏は「長崎から出土する焼締瓶は交易品の運搬容器とみられるが、ベトナムでの用途が必ずしも交易品と同じ物を貯蔵したとは限らない。また、ベトナムでは石灰壺が出土するが、長崎では出土しない」とし、食生活や好みの違いについて言及している。^{注12}このような考え方があるものの、わたしは次の史料により、壺に関しては交易品の運搬容器とみたい。普通砂糖は固体であり、500斤や2000斤という記録もあり、3000斤に至っては1800kgなのである。したがって、森村氏のいう固体の砂糖とは考えない。江後迪子氏によれば、慶長15年(1610)には、安南王(コーチシナ：阮氏支配)、東京王(トンキン：鄭氏支配)の使者が家康を訪問し、糖水10壺を献上している。^{注13}ベトナム方面から来た使者が献上したのが、焼き締め陶器に入れられた、このような液体であったと想定したい。

まとめ

京都府出土のベトナム陶磁器について紹介した。

内膳町で出土した例は、豪商の持ち物であった可能性が高い。生糸を扱うこの商人が中国を始め東南アジアの製品を持っていたのは当然である。

これに対して笠置山出土例は、新たな視座が必要な例である。現在の笠置山は京都府の最南端で、静かな山間の町である。しかし、古代～中世には北に木津川、南に柳生から奈良へ続くという水陸両方の路がある、交通の要衝であったのである。

なお、織豊期に特徴的に出土する犬型土製品も出土していることから、文献では知られていない有力武将の滞在があったかもしれないし、そうでなければ当時の寺の生活も検討しなければならない。

笠置山出土のベトナム陶磁器は、以上のように地理的、政治的、文化的という多角的な視点が必要であることを、わたしたちに示唆したと思う。そして、ここにもたらされるには意味のある中継地点が必要である。今後、この視点を念頭において研究したい。

(いの・ちかとみ＝当センター調査第2課次席総括調査員)

- 注1 森村健一「15－17世紀における東南アジア陶磁器からみた陶磁の日本文化史」『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集 2002
- 注2 森本朝子「ベトナムの貿易陶磁ー日本出土のベトナム陶磁を中心にー」『上智アジア学特集貿易陶磁研究』第11号 上智大学アジア文化研究所 1993
- 注3 能芝 勉「京都市内出土の東南アジア陶磁についてー柳馬場通竹屋町出土のベトナム陶磁を中心にー」『研究紀要』第4号 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所 1997
- 注4 平良泰久ほか「平安京跡(内膳町)昭和54年度調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概要』京都府教育委員会 1980
- 注5 大沢真澄・藤波朋子・二宮修治・菊池誠一「VI日本・ベトナム出土のベトナム焼締陶器の自然科学的研究」『近世日越交流史ー日本町・陶磁器』柏書房 2002
- 注6 伊野近富「史跡名勝笠置山発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第119冊 2006
- 注7 菊池誠一「16・17世紀の中部ベトナムの陶磁生産ーミースェン遺跡出土遺物とその意義」『古代学研究』138号 1997
- 注8 小林義亮『笠置寺激動の1300年』文芸社 2002
- 注9 森 毅「IV大坂出土のベトナム陶磁器」『近世日越交流史ー日本町・陶磁器』柏書房 2002
- 注10 ファン・フィ・レ「I世界・地域・ベトナムの歴史的背景と15～17世紀の越日関係」『近世日越交流史ー日本町・陶磁器』柏書房 2002
- 注11 青木美智男「II近世初期、オランダ連合東インド会社平戸商館の貿易陶磁と幕藩領主」『近世日越交流史ー日本町・陶磁器』柏書房 2002
- 注12 扇浦正義「近世貿易港としての長崎とベトナム」『近世日越交流史ー日本町・陶磁器』柏書房 2002
- 注13 江後迪子「南蛮から来た食文化」弦書房 2004

ときづか 時塚遺跡第17次の発掘調査

岡崎 研一

1. はじめに

時塚遺跡は、亀岡市北部の桂川左岸に位置する集落遺跡で、稲築山から南東方向に延びる台地を中心に、東西800m・南北650mの範囲に広がっている。これまでの調査から、弥生時代中期の竪穴式住居跡、方形周溝墓群と古墳時代中期後半から後期の時塚古墳群、そして奈良、平安時代の掘立柱建物群などを確認している。

この調査は、近畿農政局が実施している国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴い、同局の依頼を受けて、平成19年4月23日から9月27日にかけて実施したものである。今回の調査は、時塚遺跡南東部の亀岡市馬路町筋違から千歳町小角にかけて、約4,300m²を対象として実施した。

2. 調査概要

(1) 弥生時代

L5・L7地区から22基以上におよぶ弥生時代中期の方形周溝墓を検出した。規模は、一辺5～15m、深さ0.3～1.0mと様々であり、その平面形態も周溝が全周する一群や、「コ」字状に巡らす一群、一辺ごとに単独の溝を設ける群に分類できる。

数基の方形周溝墓から埋葬施設を検出しており、多くは1基だけであるが、5基の埋葬施設を有する周溝墓もある。

埋葬施設の規模は、大きな墓壙は1.3×2.7m、深さ約0.4m、小さな墓壙は0.8×1.3m、深さ約0.4mを測る。棺痕跡が認められるものもあった。L6地区からは、木棺墓・土器棺墓1基ずつを検出した。土器棺墓は、弥生時代中期の壺に甕の体部片で蓋をしている。

(2) 古墳時代

時塚1～3号墳の南方において、新たに方墳9基と円墳2基の11基を確認した。周溝内の出土遺物から、方墳9基は古墳時代中期後半、円墳2基は古墳時代後期前半に築造されたことがわかった。



第1図 調査地位置図

(国土地理院 1/50,000 京都西北部)



第2図 時塚遺跡第17次調査遺構配置図

古墳の規模は、方墳が一边8～13m、円墳が径13mと18mであり、埋葬施設は後世の削平によって認められなかった。また3基の竪穴式住居跡を検出した。内1基は古墳時代前期である。今回の調査地南側で京都府教育委員会が調査を実施しており、中期前半の竪穴式住居跡を検出している。



第3図 L5地区全景(北北西から)



第4図 L4地区時塚7号墳近景(北から)

(3)奈良時代

奈良時代中葉～後半にかけての掘立柱建物跡18棟を検出した。内3棟は総柱建物であり、倉庫を含む建物群が存在することがわかった。建物規模から一般集落とは考えがたく、出土遺物に瓦も含まれることから、官衙的な施設が存在したと思われる。

3. まとめ

これまでの調査で、時塚遺跡について明らかになった事柄を時代毎にまとめておく。

弥生時代 時塚遺跡は、北半に居住域が、南半に墓域が弥生時代中期に営まれた。今回の調査で墓域がさらに南に広がり、その規模は東西100m・南北200mに及ぶことがわかった。府内では大山崎町下植野南遺跡で約150×250mと大規模な方形周溝墓群が見つかった。当遺跡もこれに比肩する府内最大級の方形周溝墓群であり、弥生時代中期の拠点的な集落遺跡であることがわかった。

古墳時代 古墳時代中期後半～後期前半になると、時塚1～3号墳が築造される。1号墳は一辺約30mを測る5世紀後半の方墳で、造り出しと葺石を持つ。出土遺物に埴輪があり、盾持ち人形埴輪は希有な事例である。2号墳は一辺約15mの方墳で、5世紀末に築造された。3号墳は径約25mの円墳で、6世紀前半に築造された。1・3号墳は、各々時代の首長墓と考えられる。また、時塚1号墳は、その規模や副葬品から、坊主塚古墳(馬路町)・中1号墳(千歳町)とならび、桂川東岸地域の代表的な首長墓として評価される。今回確認した方墳群は時塚1号墳とほぼ同時期であり、なおかつ規模が小規模であることから、時塚1号墳の被葬者の権力構造を支えた人々の墳墓と思われる。南丹波地域でも桂川東岸地域北部には、3首長が各々の構成員を従えて割拠していた状況が読み取れ、古墳時代の支配体制の一端が明らかになり、考古学的に貴重な資料を提供した。

奈良時代 奈良時代中葉～平安時代後半になると、時塚遺跡中央付近に掘立柱建物跡群が集中する。建物規模などから官衙的な施設を想定でき、桑田郡衙の可能性が考えられる。これまでの国営農地関係遺跡の発掘調査では、池尻・車塚遺跡から官衙の様相をもつ建物群が見つかっており、桂川東岸地域には丹波国分寺・国分尼寺が築造され、その際に創建時の瓦を三日市遺跡から運ぶなど、奈良時代初期から計画的に開発されていたことがわかった。かつて足利健亮氏は、これらの遺跡を縦断する形で古山陰道を想定されており、律令期の丹波を考える上で貴重な資料を提示したといえる。

(おかざき・けんいち＝当センター調査第2課第1係専門調査員)

平成19年度発掘調査略報

1. 宮津城跡第14次

所在地 宮津市鶴賀

調査期間 平成19年5月28日～8月30日

調査面積 690㎡

はじめに この調査は、大手川激甚災害対策特別緊急事業に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。同事業に伴う発掘調査は、平成17年度に始まり、今年度が最終年度である。昨年度の調査では江戸時代前期の枅形虎口の石垣や、城内から大手川に繋がる石組の排水溝などがみついている。

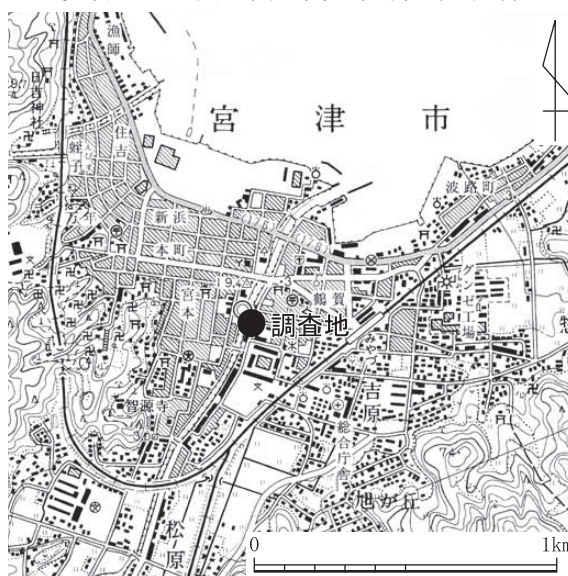
宮津城は天正8(1580)年、細川藤孝によって築城された。慶長5(1600)年の関ヶ原の戦いの前に細川藤孝は宮津城を自ら焼き払い、田辺城(舞鶴市)に籠城したと伝えられる。この功で細川氏が九州に封じられた後、京極高知が田辺城に入る。京極高知が元和8(1622)年に死ぬと、丹後は3人の子に分割して相続され、それぞれ田辺・宮津・峰山藩となる。宮津藩主となった京極高広は城下の整備を始め、寛永2(1625)年に完成したとされている。

調査概要 今年度の調査区は3か所に分かれており、北から順に14-1・2・3区とした。

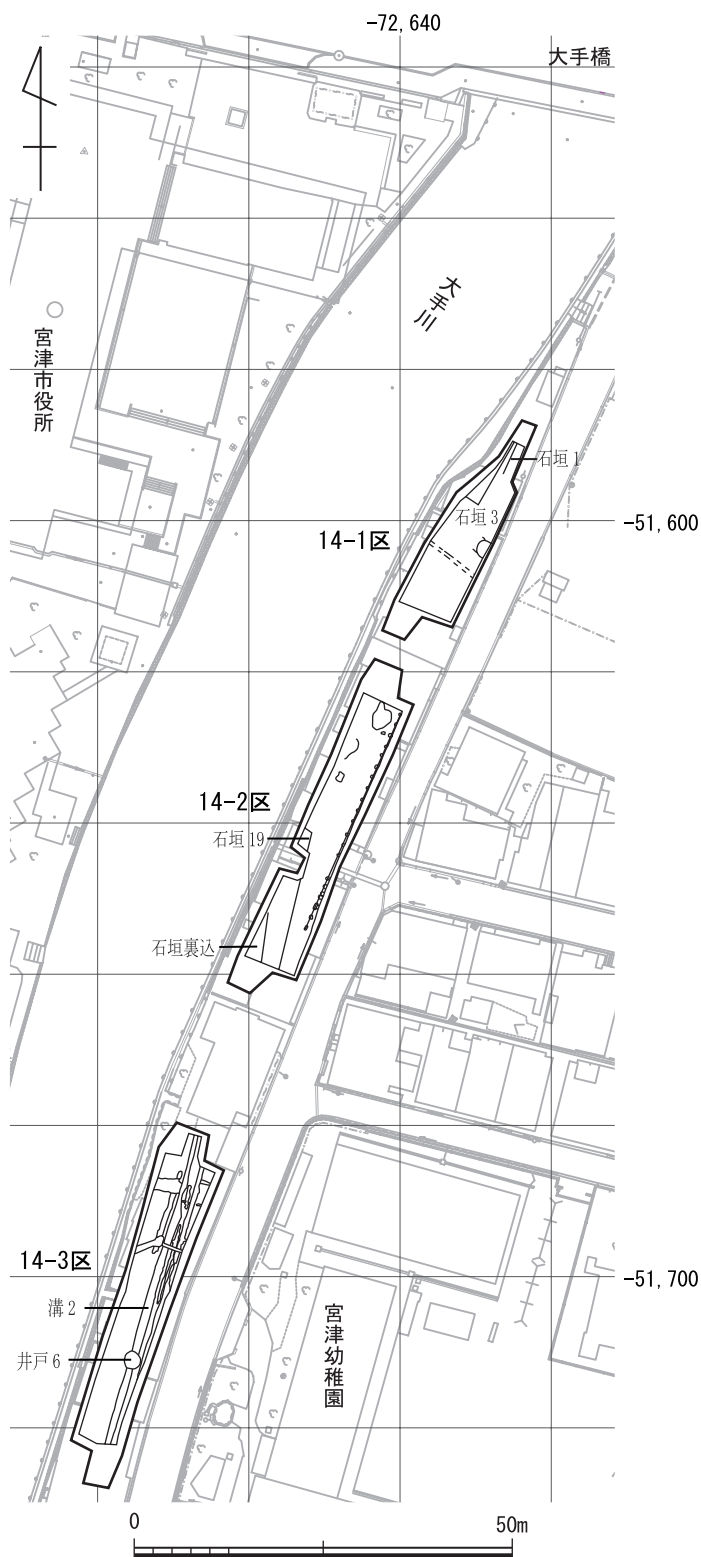
14-1区では石垣と石室・石組排水溝・土坑など、14-2区では石垣・石垣裏込め・土坑など、14-3区では溝・石組井戸などを検出した。

14-1区の石垣1は東に面を向けたもので、大手川(外堀)に沿う城壁の内側の石垣にあたる。約4.5m分検出した。幕末に築かれたものと思われる。石垣3は西に面を向け、調査区北端から南に約8.4mのところ直角に西に折れ、約2.2mで調査区外に延びる。築造年代は明らかでないが、使われている石材が大きいことなどから、江戸時代初めに遡るものと思われる。

14-2区の石垣19は西に面を向けるもので、調査区中央付近でやや鈍角に西に折れ、南に面をもつ石垣となり西に続く。延長約20mにわたって検出した。裏込めの状況から高石垣とは考えられないことや、石垣の前が粘土敷きの城内道路となっていたと考えられることから、外堀の石垣ではなく、城内三ノ丸の屋敷地のまわりを画する石垣と考えられる。裏込めから鉄線切



第1図 調査地位置図(国土地理院1/25,000宮津)



第2図 調査トレンチ配置図

築かれたと考えられるもので、この時期の宮津城で石垣を築くなどの一定の整備が行われていたことが確実にになった。これまで、細川期・京極期に分けて考えられてきた初期の宮津城と城下町の歴史を、細川期・京極高知期・京極高広期に区分して再検討する必要があるだろう。

(森島康雄)

り(コビキB)の瓦が出土し、石垣が江戸時代初期の遺物を含む層で埋まっていることから、関ヶ原の戦いの後に丹後に入った京極高知が築き、高知死後宮津藩主となった京極高広による城下整備に伴って埋められたものと考えられる。

14-2区南西隅でみつかった集石は、石垣19を埋めた層を切り込んだ掘形の中に角礫が詰められたもので、外堀石垣の裏込めにあたると考えられる。江戸時代中期頃に築かれたものと考えられる。

14-3区を南北に貫く溝2は、幅約1.1m、深さ約0.5m前後を測る素掘り溝である。掘削直後に洪水で一旦埋没したが、幅約0.7m、深さ0.2mの規模でほぼ同位置に掘り直されている。絵唐津皿・唐津折縁皿・芙蓉手の青花・漆器椀・下駄などが出土しており、江戸時代初期の遺構と考えられる。遺物の大半は掘り直された溝から出土した。14-3区南部で見つかった井戸は幅7~20cm程度の縦板27枚を組み合わせて直径約1mの井筒を作り、その上に花崗岩の石組井筒を載せるものである。石組は1段分残っていた。井筒内から多量の瓦と陶磁器が出土した。江戸時代中期頃の遺構と考えられる。

まとめ 宮津城の歴史は、細川藤孝による自焼から京極高広入城に伴う整備までの間の約20年間の様子がよくわかっていなかった。14-2区でみつかった石垣19は、京極高知が慶長5(1600)年に丹後に入った後に

2. 史跡及び名勝笠置山

所在地 相楽郡笠置町笠置
調査期間 平成19年4月23日～9月26日
調査面積 600m²

はじめに 史跡及び名勝笠置山は、北に木津川を臨み、南は柳生から奈良市街地へ抜ける柳生街道の始まりに位置しており、交通の要衝となっている。笠置山には山頂に笠置寺があり、奈良時代に作られたという巨大な磨崖仏が有名である。平安時代には修験道や弥勒信仰で人々が参詣していた。枕草子にも「寺は壺坂、笠置」とあり、都人にとって憧れの地であった。中世になって、興福寺僧貞慶が入山してから興隆し、六角堂や鐘楼などが建造された。鎌倉時代末期には後醍醐天皇が、倒幕のため笠置山に立てこもり、鎌倉幕府軍と戦ったことが『太平記』に記されている。1331年の元弘元年のことであるが、約1ヶ月の攻防の末、後醍醐軍は敗れ、山は炎上したという。戦国時代は山城国守護代木沢長政の城となっていた。

調査概要 今回の発掘調査は、中世の建物群があったと考えられる谷部と、笠置山城の出入り口である虎口(こぐち)と考えられる地点を調査した。虎口部分(第1トレンチ)では、戦国時代の堀は途切れており、幅2mの土橋があったことが判明した。トレンチ幅が3mなので、堀の全容は不明だが、確認された幅は2.2mである。端のみが確認されたので、深さは0.5mしかないが、平成17年度の試掘調査では幅4.2m、深さは0.8mであったことが判明している。鎌倉時代の堀は幅6.5m以上である。平成17年度の試掘調査では深さ2mであった。北側は花崗岩の岩盤を削って肩としており、南側も同様であった。

谷部は南が高く、北が低いが、階段状に6段の平坦部で仕切られていた。平坦部は15×20m程度がほとんどであるが、20×25mと広い箇所も2ヶ所あった。その谷部では、3時期の遺構を確認することができた。第1期は鎌倉時代末期、元弘の乱で廃絶した遺構群である。第2期は南北朝期で、廃絶した第1期の遺構群の上に溝や土壇などを復興した段階である。第3期は戦国時代で、城として使用した段階である。

谷部での調査トレンチは、南から第2トレンチ、中央部で第3～6トレンチ、谷の屈曲部である北東部で第7・8トレンチ、谷が西に屈曲した北西部で第9・10トレンチをそれぞれ設定した。



調査地位置図(国土地理院1/50,000奈良)

第1期に伴う遺構は第4トレンチから第6トレンチまで認められた。それは、焼土に覆われた石列である。これは建物の土壇の端を堅固にする施設と考えられる。また、多数の土師器皿、瓦器碗などが壁土と思われる焼土塊とともに埋没していた。遺物の年代は鎌倉時代後期であり、まさしく元弘の乱に伴う火災の時期に相当する。出土遺物は豊富で、中型の土師器皿は口径11cmほどのいわゆる赤土器と白土器である。瓦器碗は高台がほとんど退化したものと、まったく粘土紐による高台がないものの2種がある。常滑産甕・壺、東播磨魚住産の鉢や甕、瓦器碗・火鉢・香炉、銅製碗・銚子、鉄滓、鉄釘、石鍋などのほか、中国龍泉窯青磁碗・香炉、中国南部産白磁壺・皿、褐釉壺、青白磁小壺、高麗青磁碗という、東アジアとの貿易によってもたらされた製品が多い。

第2期に伴う遺構は第3トレンチから第7トレンチまで認められた。特に、第3・4トレンチでは谷の東斜面の下端で、30mの長さにはわたって石組み溝が設けられていたことがわかった。溝の内法は0.7mである。その西隣に幅1mほどの土手状遺構があった。これは、通路の可能性である。この遺構は第3トレンチで東に屈折している。南側には土壇があり、北側の敷地と土手状遺構で分けていた可能性がある。第6トレンチでも谷の東斜面の下端で溝が設けられていた。ここでは、花崗岩の大岩があったため、水を通すため岩を削って幅50cmの溝を設けていた。この事実は、笠置山に優秀な石工集団が存在していたことを証明している。この溝の西側でも土手状遺構が認められた。断面を断ち割った結果、焼土層の上に土手状遺構を作っていることが判明した。また、第5トレンチまで続く南北の石列を確認したが、これも、第1期に伴う東西方向の石列の上に作られていた。第5トレンチの南部では2.1mごとに石が置かれていた。建物の礎石と考えられる。出土遺物は、土師器皿・土釜、信楽甕・鉢、古瀬戸鉢・おろし皿、瓦器火鉢、龍泉窯青磁碗などがある。

第3期に伴う遺構は、第1トレンチの堀のほか、北側で柱穴を2基確認した。出土遺物は土師器皿、龍泉窯青磁碗などがある。

まとめ 今回の調査により、鎌倉時代末期には谷部に土壇を設け、建物を建てていたことが判明した。そこでは、日本製の日常使う土器・陶磁器のほか、中国製陶磁器をはじめ、高麗青磁、銅製碗・銚子などがあり、香炉や火鉢、銅製碗は仏教の行事に使う六器という構成から、建物が僧坊であったといえよう。すなわち、中世前期の山岳寺院を考える上で重要な資料が提示されたことになる。また、「岩を切って堀とし」た1トレンチの堀の存在は、太平記に記されたとおりであり、文献資料を考古資料が検証した例となった。

(伊野近富)

3. 室橋遺跡第11次

所在地 南丹市八木町室橋
調査期間 平成19年4月23日～9月13日
調査面積 2,000m²

はじめに

室橋遺跡では、府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」に先立ち、京都府農林水産部の依頼を受け、平成18年度から実施している。昨年度の調査では、古墳時代の竪穴式住居跡や奈良時代の掘立柱建物跡、弥生～平安時代の大規模な溝群がみついている。今年度の調査は、大きく北部(1～6地区)と南部(7地区)の調査地に分けて実施した。

なお、南部の第7地区については、調査対象地2,000m²のうち、北側を当調査研究センター(第11次調査)が、南西部を南丹市教育委員会(第12次調査)が、南東部を京都府教育委員会(第13次調査)が分担し、調査を行った。

調査概要

以下、各地区で検出した主要な遺構について略述する。

第1地区では、前年度の調査で確認した、弥生時代後期後葉(2世紀～3世紀初め)と推定される大溝の延長部を検出した。溝は北西から南東方向に延びる。溝の断面は台形状で、幅約5.5～6m、深さ2.1mを測る。

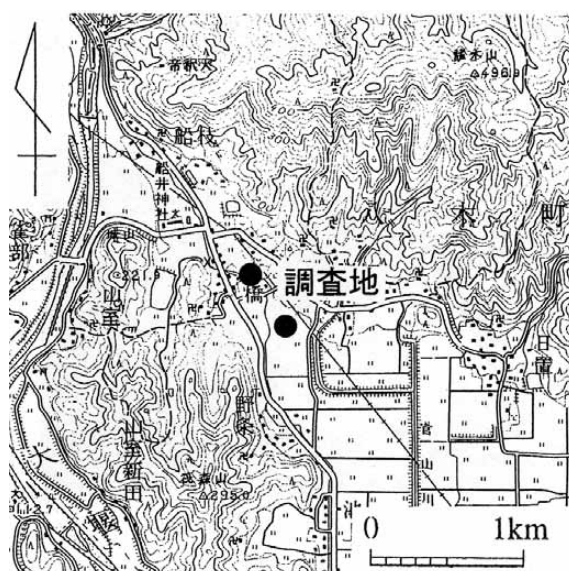
第2地区では、弥生時代後期～古墳時代初めと思われる幅3m、深さ1.5mの断面「V」字形の溝を検出した。

第4地区では、埋葬施設と思われる土坑2基と奈良時代後期の掘立柱建物跡を検出した。

第5地区では、奈良時代後期～平安時代初頭と思われる溝を検出した。

第6地区では、奈良時代の掘立柱建物跡を検出した。

第7地区では、古墳時代中期の方形竪穴式住居跡3基、溝群、土坑などを検出した。竪穴式住居跡のうち1基は一辺5.5mを測り、住居の西辺に残りの良い造り付け竈をもつ。床面や貯蔵穴から土師器の甕などが出土した。調査地の



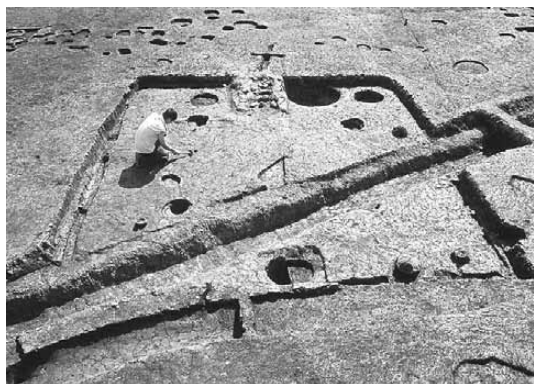
第1図 調査地位置図
 (国土地理院1/50,000京都西北部)



第2図 弥生時代後期の大溝(第1地区)



第3図 奈良時代の掘立柱建物跡(第6地区)



第4図 平安時代の大溝(第7地区)



第5図 平安時代の大溝(第7地区)

西端で検出した溝は、幅約4m、深さ約1.5mを測る断面台形状を呈する大規模な溝で、北西から南東方向にのびる。溝内には礫石の集積した部分があり、堰または護岸の石の転落と思われる。溝の掘削時期については、上層から平安時代後期の土師器、瓦器等が出土したが、南丹市教育委員会の調査地では、溝の下層から平安時代初頭の須恵器が見つかっており、掘削時期はそのころまで遡る可能性がある。このほか、概ね南北方向にのびる10数条の溝を検出した。いずれも奈良時代から平安時代に属するものと考えられる。

まとめ

(1)調査地からはメノウ製の石鏃が見つかっており、室橋遺跡の開始時期が縄文時代に遡ることが判明した。

(2)今回調査地の北部では、弥生時代後期の大規模な溝が検出された。この付近に同時期の集落が存在する可能性がある。

(3)第7地区から3基の竪穴式住居跡が確認され、古墳時代集落の南への広がりが判明した。

(4)当遺跡では、これまで各地点で奈良時代頃の掘立柱建物跡が確認されているが、今回も第4～6地区を中心に建物跡が検出され、奈良時代には集落域が大きく広がるものと思われる。

(5)奈良時代後半から平安時代後期に属する大小の溝が確認された。これらは水田耕作に伴う灌漑用水とみられる。当地域は、平安～室町時代には「丹波国吉富荘」が置かれていた所であり、荘園設置前後の当地域の開発状況を知る上で新たな知見を得た。

(辻本和美)

4. 難波野遺跡第6次

所在地 宮津市大垣
調査期間 平成19年6月12日～8月24日
調査面積 450m²

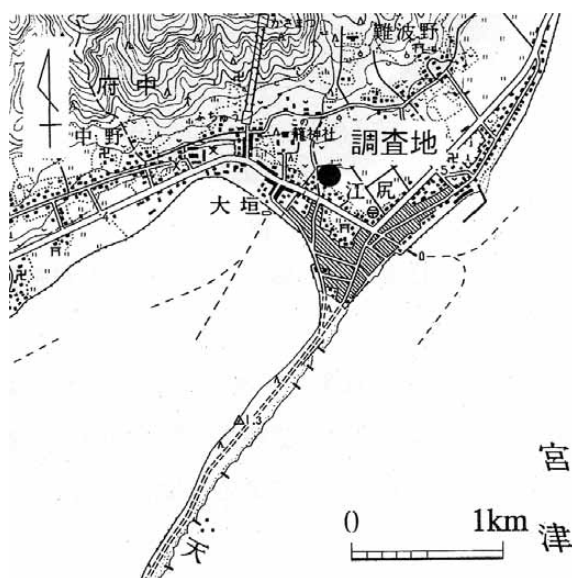
はじめに 今回の調査は国道178号道路新設改良事業に伴うもので、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査地は、天橋立の北側に位置する。難波野遺跡は、弥生時代から中世にかけての遺跡として知られており、これまでの調査で弥生時代中期の方形貼石墓、古墳時代中期の土器を「コ」の字状に並べた祭祀遺構、中世の井戸跡や柱穴などを検出している。遺物としては、土器等のほかに、「寛治五年」(1091)の年号が墨書された木簡が出土している。また、漆器が多数出土しているのが注目される。

難波野遺跡では、平成14年度から6年にわたって発掘調査を実施してきた。今年度は、その最終年度にあたる。

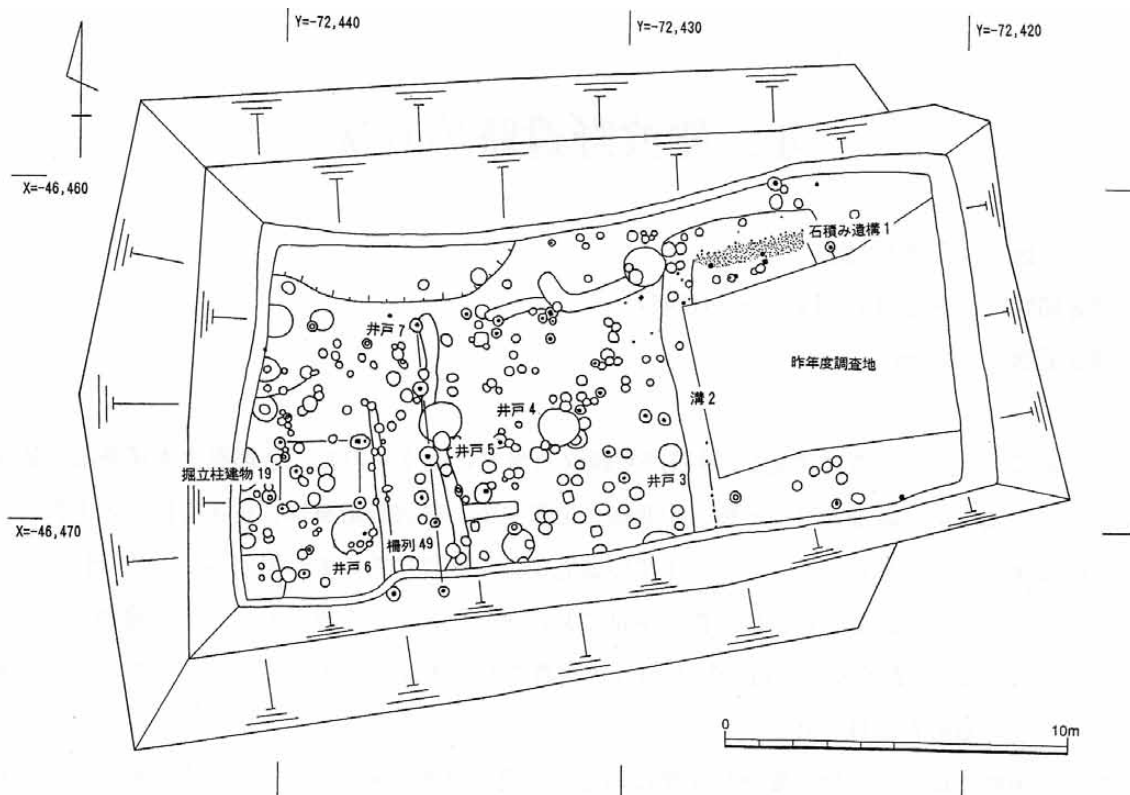
調査概要 今回の調査地は、昨年度、古墳時代中期の祭祀遺構や中世の漆器などが多数出土した地点の西側隣接地で実施した。調査地北東側で、杭で裾部を固定した石積み遺構を検出した。何らかの建物の土台か。ほかにも、柱根が残る柱穴を多数検出した。この中には、1間×1間の掘立柱建物跡としてまとまるものや、柵列になるものがある。また、限られた調査地にもかかわらず、井戸が多数分布する。縦板組方形のもの、石組みのもの、底部に曲物を入れた小規模な石組み井戸、曲物だけが残存しているものなど、さまざまな形状の井戸がみられる。遺物では、昨年度同様、黒漆塗りの上に朱漆で花文などを描いた漆絵の漆器碗や皿などの高級食器などが多数出土した。陶磁器では、中国建窯産の天目碗片の出土が注目される。これらの遺構、遺物は13世紀中頃を前後する時期のものと思われる。

まとめ 今回の調査では、中世の集落の一部を確認した。下層については、古墳時代の遺物をわずかに含む層などを確認したが、顕著な遺構は存在しなかった。

また、今回の調査では、調査地付近が陸化して生活に活用できるようになったのが12～13世紀頃で、それ以前は、阿蘇海が入り込んでおり、



第1図 調査地位置図
 (国土地理院 1/50,000 宮津)



第2図 調査地平面図



第3図 漆器碗

海岸もしくは湿地状の場所であったことが確認できた。

このような立地条件が考えられることにより、昨年度検出した古墳時代の祭祀遺構が、海の傍に設けられたものである可能性が高くなった。



第4図 掘立柱建物跡と柵列(南から)



第5図 井戸(南から)

(引原茂治)

5. 長岡京跡右京第909次・開田遺跡

所在地 長岡京市友岡一丁目1-1
調査期間 平成19年6月12日～8月24日
調査面積 250m²

はじめに 今回の発掘調査は、京都府立乙訓高等学校の校舎改築に係わる事前調査として、京都府教育委員会の依頼を受けて実施した。調査対象地は、長岡京条坊の復原案に従えば右京七条二坊十町及び同十五町・西二坊坊間西小路(新条坊)にあたる。また東辺部は同時に弥生時代から近世まで断続的に続いた開田遺跡の範囲内に含まれている。

調査概要 平成18年度の試掘調査においてピットや溝など遺構を確認した3か所の試掘坑を中心に、東西長の調査区を設定して面的な発掘調査を実施した。調査地は府立乙訓高等学校敷地内の北側に位置し、旧校舎の南2棟間に挟まれた、旧校舎の基礎工事で破壊を免れている可能性が高い地域である。昨年度の試掘調査及び過去3度の校地内調査で、東方に向かって地形が下降し、また西方は長岡競馬場建設時に大きく削平されていることがある程度推定されていたが、削平域がどの地点まで東方に及び、さらに旧地形が緩斜面を形成しているのかどうか、また緩斜面であれば、その上位堆積土層の文化的意義を解明できるものと期待された。発掘調査の結果、地山削平や旧校舎基礎・受水槽・渡り廊下基礎などで大きく攪乱されていたにも拘らず、ピット列・畦畔痕跡・溝・土坑などの遺構を検出した。また堆積土や遺構埋土内から、須恵器・土師器・中国製輸入陶磁器・瓦質土器・近世陶磁器など、古墳時代～江戸時代の遺物を収集した。

まとめ 今回の調査地では、居住空間としての段丘崖傾斜地利用ではなかったことが判明した。古墳時代に傾斜地上面は遺物包含層を形成し、その後は現状を維持しつつ中世を経て、近世初頭頃に農地の拡大確保のため傾斜面を開削して階段状にテラスを造り出し、側溝・盛土などで畦畔を設けて農地として使用された。明治時代以降は、古地図を参照する限り水田と化しており、昭和初期の長岡競馬場建設によって段丘を削平し東方に土を再堆積させて広域な平坦面を造出させたようである。昭和30年代後半頃には現在の府立乙訓高校がこの地を開校する際にも一部造成工事によって開削・盛り土が実施され、今日にいたった。

(松井忠春)



調査地位置図
 (国土地理院 1/25,000 京都西南部)

トピックス

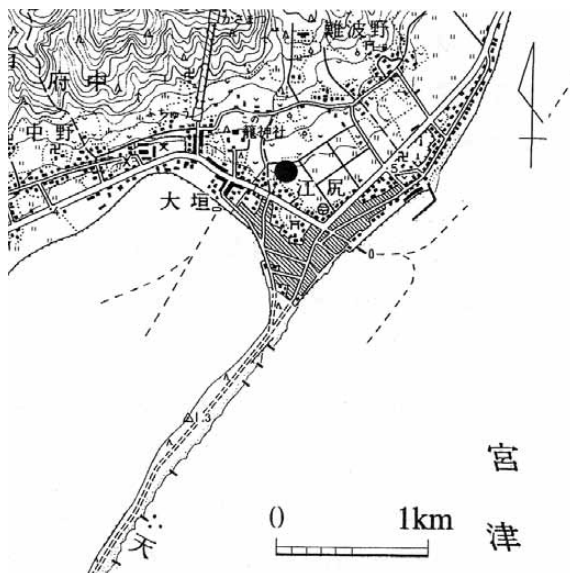
寛治五年銘の木簡

難波野遺跡は、宮津市大垣、難波野、江尻に所在し、日本三景の一つである天橋立の北側に位置する。北側の山地から流出する小河川によって形成された扇状地上に立地する。宮津市は、旧丹後国に属し、難波野遺跡は「府中」と呼ばれる地区にある。府中地区には、丹後国分寺跡などが存在し、丹後国府ないしは国庁の存在が想定されている。この遺跡内では、道路新設改良事業に伴って、平成14年度から今年度まで6次にわたって発掘調査を継続して行っており、弥生時代から中世にかけての多くの遺構、遺物を検出している。

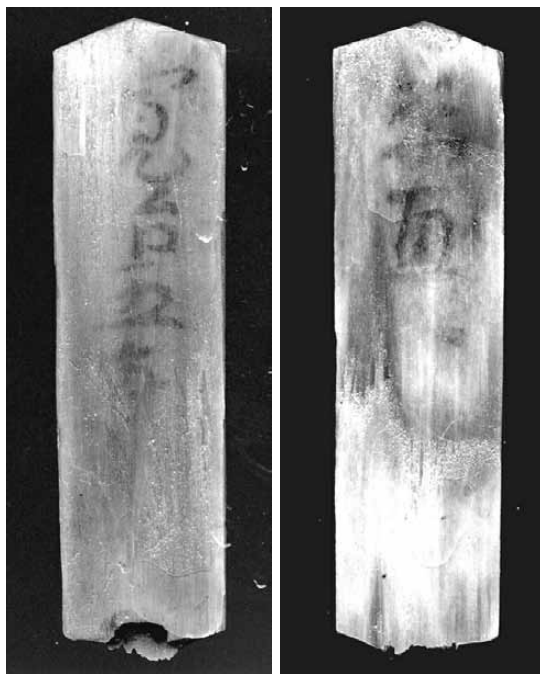
今回紹介する木簡は、昨年度の第5次調査の出土遺物で、13世紀頃の柵列を構成する柱穴の埋土中から出土した。この木簡は、題籤軸とみられる。題籤軸は、書類などを巻きつけた巻物の軸であり、先端部に書類の内容を書いた札状の見出しが付く形状のものである。

本品は、軸部を欠失し、見出しの札状部分だけが残存する。残存長8.2cm、幅2.1cm、厚さ0.4～0.6cmを測る。軸部側が厚い。この木簡の片面には、「寛治五年」（1091）の年号が墨書される。もう片面には2ないし3文字が墨書されている様子であるが、かなり薄れており判読できない。上部の文字は「米」と判読することも可能である。その次の文字は、現状では不明である。さらに、数字のような文字が書かれていた可能性も考えられる。この面には、巻物の内容を示す文字が書かれていたものとみられる。ちなみに、大江匡房の日記である『江記』には、寛治五年に「実信」が14歳で丹後の国守に任じられたことが記されている。実信は藤原氏と考えられている。題籤軸は、官衙関連の遺跡からの出土例が多い遺物であり、調査地付近に何らかの官衙的な施設があったことを想定させる。上記のとおり、この遺跡周辺は「府中」と呼ばれており、あるいは丹後国庁に関連する可能性が考えられる遺物として、重要な資料と言えよう。

（引原茂治）



第1図 難波野遺跡の位置
(国土地理院 1/50,000 宮津)



第2図 木簡の赤外線画像

舞鶴市中山近世墓の錫杖^{しゃくじょう}

はじめに 中山近世墓は、舞鶴市中山・水間に所在する戦国期の山城である中山城内の南端にあります。中山城は、丹後の国主、一色義道が細川・明智勢に攻められ自刃したと伝える城で、標高60m、城郭の幅約20m、延長500mを測り、東側は深田、西側は豎堀と険峻な急坂が由良川に没しています。北側には大規模な空堀二か所を設け、さらに川を廻らしており、南は一色氏の建部本城に通じています。

調査概要 中山近世墓は、昭和58年に6基からなる土葬墓のうち1～3号の3基が調査されました。今回の調査では、残りの4～6号の3基を調査し、次のような遺物が出土しました。

第4号墓では、錫杖、鉾金具、縁金具、古銭6枚などが出土しました。第5号墓では、錫杖、小環付割釘、縁金具、鉄釘などが出土しました。第6号墓では、錫杖、銅椀(金)、鉾金具、古銭6枚が出土しました。

錫杖について 錫杖はその形の上から大きく杖頭部(錫)と木柄部、石突との三部分に分けられます。今回出土した杖頭は塔婆形に作り、大環(外輪部)を心葉形に作っています。これに揺ると音を発する小環を数個(普通六個)つけていますが、3基の墓から出土した錫杖は杖頭が摩耗していて小環は欠落しているものが多くありました。また木製の柄の一部が残っていましたが、墓壙の大きさから柄の短い手錫杖と考えられます。副葬品の状況は、生前墓の主の使用していたものが埋納されたものと考えられます。

さらに、それぞれの墓の主が皆、錫杖をもっていたことから、これらの墓の主は修験道や仏道にかかわりのあった人ではないかと考えられます。

(戸原和人)



4号墓の遺物



5号墓の遺物



6号墓の遺物

普及啓発事業

当センターの主な業務は、大きく分けて二つあります。一つは遺跡の発掘調査とその記録、もう一つは、調査で明らかになった事柄を広く府民の皆様にお知らせし、埋蔵文化財保護について考えていただく普及啓発業務です。

普及啓発業務には、発掘調査現地説明会・埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会などの開催、埋蔵文化財情報誌の刊行などがあります。調査第1課が主にこの業務にあたっています。今年度は、例年実施してきた上記事業に加えて、出前授業、体験発掘、発掘現場・事務所訪問など、新たな取り組みを計画しました。年間を通じて実施する予定です。

今年度の上半期(4月～9月)に実施した事業の概要を紹介します。

埋蔵文化財セミナー

年に3回、府内各所で開催しています。これまでに2回のセミナーを開催しました。7月1日に、南丹市八木公民館で、南丹波の後期古墳を主題として第107回埋蔵文化財セミナーを開催しました。第23回小さな展覧会開催期間中の8月18日に、向日市民会館で第108回埋蔵文化財セミナーを開催しました(24～25頁参照)。

小さな展覧会

毎年、夏に開催しています。前年度に京都府内で実施された発掘調査の成果を紹介する展覧会です。今年度は、8月11日に向日市文化資料館で、第23回小さな展覧会を開催しました。北は宮津市から南は木津川市まで、合計26遺跡を取り上げ、出土遺物とパネルを展示しました。延べ14日間で、1,421名の方に観覧していただきました(26～27頁参照)。

現地説明会

発掘調査現場で、調査成果の説明をする催しです。

8月4日 宮津市難波野遺跡で現地説明会を開催しました。56名の方が、豊かな中世の村の様子を見学しました。

9月2日 笠置町史跡及び名勝笠置山で現地説明会を開催しました。170名の方々が、元弘の乱前後の笠置寺の様子を見学しました。

9月11日 亀岡市時塚遺跡で現地説明会を開催しました。70名の方々が、弥生時代中期の方形周溝墓、古墳時代後期の古墳、奈良時代の建物跡などを見学しました。

出前授業

学校や各種事業所に訪問し、授業を実施する取り組みです。出土遺物や参考資料を持って、授業にでかけます。あらかじめ当方で用意した遺物を教材として授業をしますが、事前に打ち合わせをして、ご希望の時代の遺物をお持ちすることもあります。

6月2・3日 京都府立るり溪少年自然の家が主催した「家族ふれあい体験」で、土器作りを

しました。施文具の縄を作り、縄文土面や土器を作り、翌日、一部を野焼きしました。野焼き体験は、参加者にとって新鮮な体験だったようです。28名が参加しました。

6月11日 京都市にある京都府立盲学校で出前授業をしました。縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器などの土器類と、鹿の革・角などを教材として、古代人の生活を体感してもらいました。子供たちは、玉類の触感と色調に深い興味を持ったようです。9名が参加しました。

発掘現場・事務所訪問

発掘調査現場の見学や発掘体験、発掘調査事務所で出土遺物の整理作業の様子を見学・体験していただく取り組みです。5月～9月に7件実施しました。

5月9日 亀岡市小学校教育研究会社会科研修部の先生方23名が、亀岡市時塚遺跡現場と調査事務所を見学しました。

6月21日 京都府立亀岡高等学校日本文化コース3年生が、亀岡市時塚遺跡で、発掘体験をしました。36名が参加しました。

7月10日 笠置町立笠置小学校6年生22名が、史跡及び名勝笠置山発掘調査現場を見学しました。

7月13日 亀岡市立川東小学校6年生2クラスの生徒合計45名が、時塚遺跡現場事務所で体験学習をしました。復元途中の土器や埴輪、石器にふれながら授業をしました。

7月27日 笠置ふれあい体験クラブ23名が、史跡及び名勝笠置山発掘調査現場を見学し、発掘体験をしました。

7月30日 京丹後市立鳥取小学校教員12名が、谷奥古墳群調査現場を見学しました。

9月19日 京丹後市立鳥取小学校の生徒16名が、谷奥古墳群で発掘体験をしました。

(田代 弘)



るり溪少年自然の家での土器作りの様子



京都府立盲学校での授業の様子



亀岡市立川東小学校6年生の体験授業

第107回埋蔵文化財セミナー

テーマ：「丹波の後期古墳」

平成19年7月1日(日)、南丹市八木公民館大集会室において、「第107回埋蔵文化財セミナー」を実施しましたので、その様子を紹介します。

京都府のほぼ中央に位置する丹波地域では、近年発掘がすすみ、古墳時代後期の古墳の様子が明らかになりつつあります。今回は、重要な発見があった南丹市城谷口古墳群の調査成果を中心に、丹波地域の古墳文化を見渡し、この地域の古墳時代の実相について検討しました。細川康晴氏の総説を端緒として、辻 健二郎氏より南丹市域の古墳の調査、当調査研究センター中川主任調査員から城谷口古墳群の調査成果について報告がなされ、成果と問題点が整理されました。



会場風景

(1)「丹波からみた古墳時代後期」

京都府教育庁指導部文化財保護課 細川康晴氏

古墳の形や大きさ、棺の構造、副葬品の内容、集落や居館の姿、さらには東アジア全体からみた列島内の古墳時代の社会の仕組みなどについて、古墳時代を通じてどのように変化してきたか、研究史をひもときながら問題点を整理し、丹波地域の後期古墳の特質を概説しました。



細川氏の講演風景

(2)「南丹市域の古墳の調査」

南丹市教育委員会社会教育課 辻 健二郎氏

南丹市を含む口丹波地域の古墳について、調査によってわかった知見を、時代を追って総括的に紹介し、この地域の古墳の実態と特質、さらにこの時代の地域の社会様子やヤマトとの関係の変化などについて解説していただきました。



辻氏の講演風景

(3)「南丹市城谷口古墳群の調査」

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 中川和哉

丹波地域の後期古墳の一例として、昨年度実施した南丹市に所在する城谷口古墳群の調査でわかったことを映像を交えて詳しく報告しました。特に2号墳は九州地方に類似点が求められる横穴式石室や蛇行剣の出土を取り上げてさらに話題を深めました。(伊賀高弘)



中川主任の講演風景

第108回埋蔵文化財セミナー

テーマ：「平成18年度の京都府内発掘調査成果から」

平成19年8月18日(土)、向日市民会館第1会議室において、「第108 回埋蔵文化財セミナー」を実施しましたので、その様子を紹介します。

向日市文化資料館で開催中の京都府内遺跡発掘調査成果展「小さな展覧会」の展示の中から、特に注目された発掘調査成果について、発表を行いました。多量の土器や玉が出土して古墳時代の水辺のマツリの姿が明らかとなった宮津市の難波野遺跡、周溝から複数の家形埴輪が出土した木津川市の内田山古墳群、全国でも珍しい八角形の可能性がある墳丘をもち、銀装の大刀などが出土したことから官人が葬られた可能性のある亀岡市の国分古墳群について報告しました。

(1)「古墳時代の土器を使った水辺のマツリ」

当センター主任調査員 引原茂治

難波野遺跡で発見された古墳時代中期の多量の土器や石製品が整然と埋納された土坑に焦点をあてて、その実態を詳細に紹介し、当時の地形環境や同じような遺構が検出された事例などからその性格について検討し、「海辺のマツリ」の跡である可能性が示されました。



引原主任の講演風景

(2)「埴輪を用いた古墳のマツリ」

当センター主任調査員 竹原一彦

内田山古墳群の調査で見つかったB-8号墳の多数の家形埴輪をテーマとして、ほぼ完全な形で周溝内に転落していたという出土状況、埴輪の形や作りの特質、さらに、周辺地域の埴輪との比較などを検討して、埴輪を用いた「古墳のマツリ」の謎に迫りました。



竹原主任の講演風景

(3)「銀装の大刀と八角形墳」

当センター調査員 筒井崇史

多数の古墳時代後期～終末期の古墳が発見された国分古墳群の全体像を俯瞰しつつ、その中で墳丘の平面が多角形に作られた国分45号墳の規模の大きさや銀装大刀の副葬などの特異性の検討を通じて、被葬者の解釈を試みました。



筒井調査員の講演風景

(4)「小さな展覧会の見どころ」

当センター資料係長 田代 弘

同時開催している第23回小さな展覧会について、見どころを紹介しました。 (伊賀高弘)

第23回小さな展覧会

当調査研究センターでは、毎年、夏期に「小さな展覧会」と題し、前年度に京都府内の発掘調査で話題になった遺跡や出土遺物を紹介する速報展を実施しています。この展覧会は、府民の方々に埋蔵文化財に対する関心と文化財保護への理解を深めていただこうと、昭和57年度から行っており、今回で23回を数えました。今年度は、当センターに隣接する向日市文化資料館を会場に、平成18年8月11日(土)から同年8月26日(日)まで、延べ14日間、開催しましたので、その様子を紹介します。

今回の展覧会は、平成18年度に京都府内で実施された発掘調査の中から、当センター調査遺跡12件と府及び市町教育委員会・関係機関が調査した遺跡14件、合わせて26遺跡を取り上げて展示しました。展示した遺跡は以下のとおりです。

展示遺跡と主な展示遺物

難波野遺跡(宮津市)・成相寺旧境内(宮津市)・宮津城跡(宮津市)・田畔遺跡(舞鶴市)・河守北遺跡(福知山市)・土遺跡(福知山市)・安井北古墳群(福知山市)・加迫古墳群(綾部市)・城谷口古墳群(南丹市)・野条遺跡(南丹市)・室橋遺跡(南丹市)・国分古墳群(亀岡市)・時塚遺跡(亀岡市)・出雲遺跡(亀岡市)・上里遺跡(京都市)・長岡宮跡(向日市)・神足遺跡(長岡京市)・伊賀寺遺跡(長岡京市)・境野1号墳(大山崎町)・木津川河床遺跡(八幡市)・薪遺跡(京田辺市)・芝ヶ原9号墳(城陽市)・高麗寺跡(木津川市)・井手寺跡(井手町)・内田山B8号墳(木津川市)・恭仁宮跡(木津川市)

主な展示遺物は、難波野遺跡のマツリに使われた土器群、成相寺旧境内の懸仏^{かけぼとけ}、安井北古墳群の鈴のついた須恵器高杯、上里遺跡の縄文時代晩期土器群、境野1号墳・内田山B8号墳の家形埴輪、芝ヶ原9号墳の陶質土器、高麗寺跡の鷗尾^{しび}などです。

展示方法

京都府を丹後、丹波、山城の3地域に分け、展示品を北から南に順に配置しました。各遺跡は、出土遺物と写真パネル、解説文で構成し、見学者の理解の助けになるよう、各所に補助説明板、参考展示品を配置しました。民具や現在使われている道具なども比較資料として展示しました。

このほか、小企画として、「水辺のマツリ」・



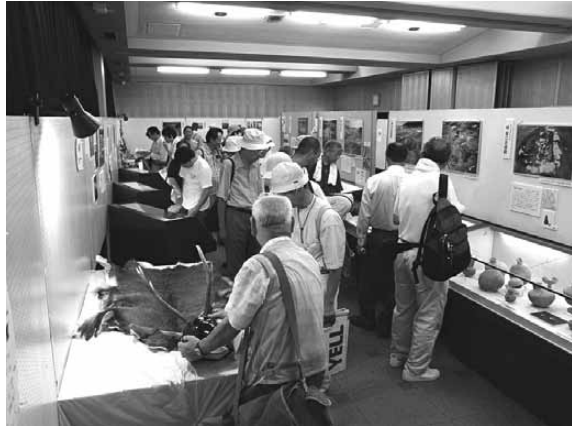
展示会場



第23回小さな展覧会図録



見学風景（「水辺のマツリ」付近）



見学風景（「体験コーナー」付近）

「古墳のマツリ」のコーナーを設置しました。「水辺のマツリ」では、宮津市難波野遺跡で出土した土器群を集めて、出土した時の迫力ある様子を再現しました。「古墳のマツリ」では、前期古墳の家形埴輪と中期の家形埴輪を直接比較していただくことを目的として、大山崎町境野1号墳(前期)と、中期の木津川市内田山B8号墳(中期)の埴輪を並列展示しました。

また、空きスペースを利用して、「ちょっと前の調査事務所」、「体験コーナー」、「普及啓発コーナー」などを設けました。

「ちょっと前の調査事務所」では、旧式のカメラや測量機材、発掘用品をまとめ、20年ほど前の調査事務所の雰囲気再現しました。

「体験コーナー」は、古代人が道具とした鹿の角と皮、石器原材料、土器破片などを配置し、さわったり、かぶったり、その触感を楽しんでいただけるように工夫しました。

「普及啓発コーナー」では、今年度、新たに取り組んだ盲学校での「出前授業」や、京都府立るり溪少年自然の家での「土器作り体験」、体験発掘の様子などを紹介しました。

なお、期間中の8月18日(土)には、今回の展覧会の内容に関連する遺跡をテーマとして第108回埋蔵文化財セミナーを開催しました。

期間中は猛暑にもかかわらず、府内外から1,421名の方々に観覧していただき、盛況のうちに展覧会を終了することができました。

最後になりましたが、今回の開催にあたり、展示品や会場、備品の借用にご理解とご協力をいただいた、関係機関および関係者の方々に礼申し上げます。

(田代 弘)

遺跡でたどる京都の歴史

縄文時代の京都

はじめに 京都府の縄文遺跡の発見は、明治時代の末から大正時代にかけて、京丹後市函石浜遺跡や京都大学構内の北白川小倉町遺跡に始まります。しかし、東日本のように畑に縄文土器が散らばっているような遺跡はほとんど無く、遺跡が加速度的に増えたのは、1980年代以降、開発に伴う発掘調査が増加してからです。当センターも発足以来、各時代の遺跡を調査する中でいくつかの縄文遺跡を調査してきました。ここでは当センターが調査を行った遺跡を中心として、縄文時代の生活をたどってみます。

縄文時代の時期区分 約2万年前、最後の氷河期が終わり、山海を覆っていた氷が溶け、海面が上がり、徐々に日本列島が現在の形に近づいていきました。やがて、粘土を焼いて器を作る人々が現れ、縄文時代が始まります。以後、稲作が定着する弥生時代まで、1万年を越える縄文時代をさらに草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の6期に分けています。それぞれの時期が何年前かという判定は、近年は理化学的な方法で算出された年代が、まだ絶対的とはいえませんが有力です。京丹後市松ヶ崎遺跡の前期前半の炭化物が5,600～5,800年前、舞鶴市浦入遺跡前期後半の丸木舟が5,260年前という年代が得られています。

また、火山の大爆発によって降り注いだ火山灰も年代を決める大きな手がかりとなっています。



志高遺跡の縄文土器(前期)

亀岡市案察使遺跡では、およそ10,700年前、韓国の鬱陵島^{うつりょうとう}の噴火による鬱陵隠岐火山灰層の下から早期前半の土器が出土して年代決定の参考になりました。

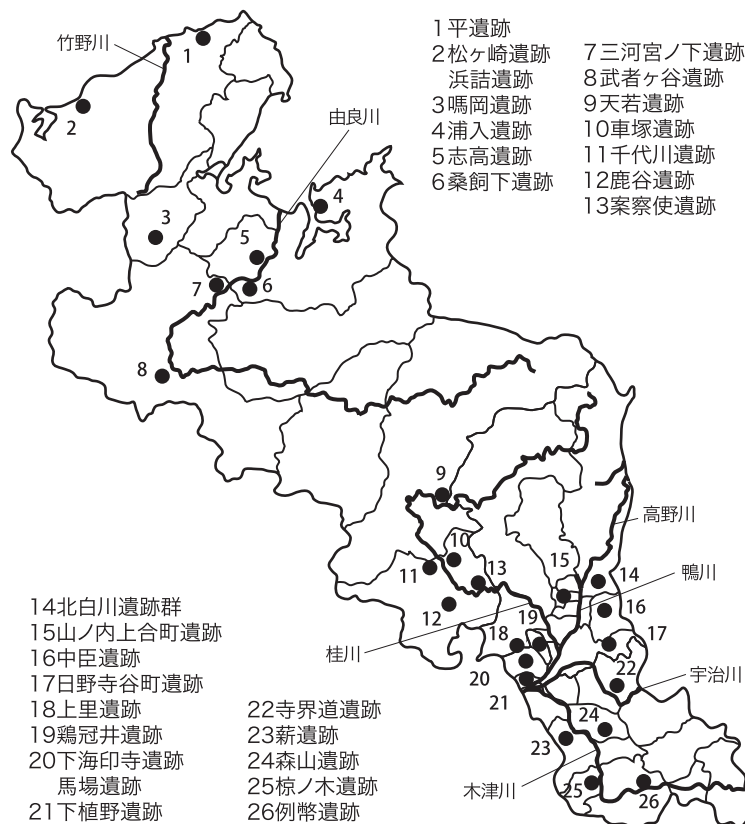
縄文土器 縄文時代と旧石器時代との違いとして、まず土器の使用があります。歴史上最初の化学変化を利用した物の発明とも言われる土器は、日本ではその表面に縄目の模様がよく着けられることから、縄文土器と呼ばれ、時代の名前にもなりました。その模様や器形の変化が、遺跡の時期を決める一つの物差しになっています。京都府で最も古いと

時期	今から
草創期	約13,000年前
早期	約10,000年前
前期	約6,000年前
中期	約5,000年前
後期	約4,000年前
晩期	約3,000年前

縄文時代の時期

考えられている縄文土器は、福知山市武者ヶ谷遺跡の小形の鉢です。草創期はこの1点だけで、早期前半のものも、案察使遺跡と京都市西ノ京南上合町遺跡の2箇所が知られるに過ぎませんが、早期後半から遺跡は増えてゆきます。縄文土器と言われるように、縄目の模様は各時期に多用されますが、縄文以外の模様もあります。棒に楕円や山形の模様を刻んで土器の表面に転がした押型文や、竹管などを押し付けた爪形文、貝殻を使った模様など、これも多種多様です。平遺跡の土器のように西日本の晩期の土器は、模様をつけない土器が大半です。土器の効用は、それで食物を煮ることによって、食べられる動植物の幅が広がりました。また、煮沸することによる殺菌効果によって、人々の健康にも大きく影響したと考えられます。

縄文の村 人々が同じ場所に長く住み始めるのも縄文時代からです。生活の条件の良い所では、



京都府の主な縄文遺跡

定住に耐えられる家が何軒か建つ集落が形づくられました。京都府で現在見つかっている最も古い住居跡は、京都市上終町遺跡の早期後半のもので長径2.8mの楕円形でした。木津川市例幣遺跡の前期の住居では、多くのサヌカイトの剥片や石鏃の未製品が出土し、石鏃を作っていました。中期末から後期の京都市日野谷寺町遺跡では3基の石囲炉と共に貯蔵穴があります。舞鶴市桑飼下遺跡では、住居に伴ったと考えられる48箇所の炉跡が残っていました。

同時に何軒の家が建っていたか分かりませんが、当時としては、相当大的な集落だったようです。木津川を見おろす台地上にある城陽市森山遺跡では後期中頃の8基の住居が出土し、公園として保存されています。京都大学構内では、中期末の住居跡や後期の土器棺と配石墓が点々と発見されています。京都大学とその周辺は北白川小倉町、追分町、別当町、上終町など縄文時代早期から晩期の遺跡が集中しています。西日本の代表的な遺跡群で、近畿、中国、四国地域の土器の指標となっており、まとめて北白川遺跡群、比叡山西南麓遺跡群とも呼ばれています。

京都市西京区上里遺跡で晩期中頃の集落がみつかりました。6基の円形、楕円形の住居と近くに土器を利用した墓がありました。晩期の住居の発見例は少ないですが、土器棺墓は京丹後市平遺跡や山城地域の中臣遺跡、寺界道遺跡、鶏冠井遺跡、馬場遺跡、下植野遺跡などがあります。

食物の狩猟と採取 舞鶴市志高遺跡は由良川の自然堤防上の村ですが、地表下4mから前期の住居跡が見つかり、当時の豊富な生活道具が出土しました。獣や魚を獲るための矢の先端に着ける石鏃、皮をなめしたり、木を削ったりする万能小刀の石匙、魚網に使った石錘、家の柱や丸木舟を作る樹木を切り倒すための磨製石斧、土を掘る打製石斧、食料の木の実や地下茎などを磨り潰すための磨石と石皿など、それぞれ大小、様々な形のものが使われていました。

食料にした動植物や骨角や植物で作った生活用具は、腐るためほとんど残りませんが、松ヶ崎遺跡では地中で十分な水に浸かり空気に触れなかったため、腐らずに残りました。その中にあったエゴマなどは栽培されていたことも考えられています。かつて自然の恵みに頼るだけと考えられていた縄文時代の食料ですが、近年の調査によって、小規模ながら食用植物の栽培や実のなる樹木の管理も行われていました。季節を決めて食料を得て、保存食を作り、それを交易品として、陸路、海路を通じて他地域と交流する姿も浮かび上がります。

(長谷川 達)



平遺跡の縄文土器(晩期)

浦入遺跡の縄文丸木舟

平成9年、舞鶴市の北端にある大浦半島の西端で、舞鶴湾口の東岸にあたる浦入遺跡で、縄文時代前期後半(今からおよそ5,000年前)の丸木舟がみつかりました。

この丸木舟は直径1m以上、長さ7m前後のスギの巨木を半分に割り、それを削り貫いて作ったもの、石の斧を使って加工したものでした。縄文時代には全国で多くの丸木舟がみつっていますが、舳先が細く、船本体部分が半円形に近いものと船体が半円形ではなく、舳先のがっしりとしたものがあります。前者の形態のものは、前からの波には弱い半面小回りがきき、河川に適したもの、後者は外洋航海用のものと考えられています。京都府内では縄文時代の丸木舟としては、向日市森本町にある森本遺跡と今回紹介した浦入遺跡のものがあります。森本遺跡のものは、その形態や出土した場所から河川に適したもの、浦入遺跡のものはその特徴から外洋航海用のものと考えられます。

浦入遺跡は外洋に面した岬の内側で、船着場のような場所にあり、この舟を利用して縄文人は外海へ漕ぎだしたものと思われます。

この浦入遺跡の調査では、北陸地方の特徴をもつ縄文土器のほか、富山県産とみられる蛇紋岩製の大型耳飾りやコハク製の玉類、少量ではあるが島根県隠岐産の黒曜石などが出土しており、山陰地方や北陸地方へこの舟を利用して航海したことが想像できます。縄文時代、縄文人は狩猟を主体として、植物を採取して生活をしていたというイメージがありますが、ヒスイやコハク・黒曜石などの原石や製品を求めて、陸路や海路で広範囲にわたって交流をしていたことがよくわかる遺跡として浦入遺跡が知られています。この遺跡では、6,300年前に、鹿児島島の桜島を形成した噴火で発生したアカホヤ火山灰と呼ばれる火山灰が、遠く離れた舞鶴まで降灰していたことも知られています。(石井清司)



丸木舟のみつかった浦入遺跡



標高0.4mの海岸で発見！



丸木舟が出土した様子
直径1m以上の杉の丸太で作られていました。

松ヶ崎遺跡の食料

京丹後市網野町の西端近く、丹後木津温泉駅の近くの沖積地に遺跡は広がっています。弥生時代前期の遺跡として知られていましたが、2000年の調査で縄文時代前期初頭の炉跡を含む生活面が確認されました。木津川に近い微高地に立地する集落で、現在の地表下約1.8mの深さで、地下水を含む地層に覆われ、普通の遺跡では腐食して残らない食物の残滓を見ることができました。

食物の内容は、海から約600mの位置にあることから、海の幸が多く、魚類ではスズキ、カワハギ、フグ、イワシ、マダイ、ヒラメなど、現在の食生活と特に変わりません。

獣類ではタヌキ、シカ、サルの骨、角が残っていました。

山野の幸としてエゴマ、サンショウ、トチ、ヤマイモなどが見られました。ヤマイモ(ムカゴ)の検出例としては極めて古い例です。

松ヶ崎遺跡の近くを流れる(丹後)木津川の海への河口部に、浜詰遺跡があります。時期は縄文時代後期前半が中心で、松ヶ崎遺跡とは大きな時期差がありますが、小規模ながら貝塚が残り、鳥獣魚介類の資料が得られています。魚類の食料事情に大差はないようですが、こちらではサメ、マグロなどの大型魚類が目立ちます。

松ヶ崎遺跡の炉跡が標高0.5mの高さにあります。氷河期が終わり、海水面が最も上昇したと考えられている前期だと、生活面は海面下という計算になります。このような場所に立地する遺跡は、早期末～前期の網野宮ノ下遺跡や志高遺跡にも見られ、数千年の間に土地が沈降しているのかもしれません。



ヤマノイモ属
ヤマノイモのムカゴ(松ヶ崎遺跡)



獲物の骨と道具(松ヶ崎遺跡)



復原された竪穴式住居跡(浜詰遺跡)

(戸原和人)

狩猟と採集

—縄文時代の石器から—

石器時代とも言われる縄文時代、狩猟具、工具としてさまざまな石器が、厳選された石材を用いて作り続けられます。

狩猟具として縄文時代で最も古い草創期を特徴付ける槍先が、京都府でも各地から出土しています。木の葉の形をしたもの(木葉形尖頭器)や、柄に取り付ける部分を突起させた有舌尖頭器(有肩尖頭器)があります。槍先に用いられている石材を観察すると、サヌカイトという奈良と大阪の境にある二上山山麓や香川県に産する石や、隠岐や長野県産などの黒曜石(天然の火山ガラス)が用いられているものもあります。これらの石材は産地が限定されるため、そのまま当時の人と物の交流・移動を示す重要な証拠となっています。遠く原産地にまで石材を採りに移動したり、どこかの中継地で完形品やそれに近い未成品を物物交換で手に入れたと考えられます。黒曜石製の槍先は鹿谷遺跡(亀岡市)から、サヌカイト製は引地城跡(福知山市)、千代川遺跡(亀岡市)などから出土しています。また、山城や丹波地域に産するチャート製のものもあります。

やがて狩猟具の主流は槍から弓となり、矢に装着する石鏃が各遺跡で出土しています。石鏃に利用される石材は京都府の場合、サヌカイトなどの安山岩系やチャートが大半ですが、黒曜石や石英、瑪瑙なども用いられています。

もうひとつ縄文時代の食物の大きな柱に、植物食利用があります。根菜類を掘るための打製石斧、ドングリなどの堅果類を磨り潰すための磨石と石皿は生活の必需品です。打製石斧は桑飼下遺跡で751本という突出した数が出土した以外は、まとまった数を出土した遺跡はありませんが、磨石、敲石の類は各遺跡に見られます。

(黒坪一樹)



左：木葉形尖頭器(鹿谷遺跡)
右：有舌尖頭器(千代川遺跡)



石鏃と石匙(薪遺跡)



磨石(薪遺跡)

薪遺跡の竪穴式住居跡と大型石棒

京田辺市薪遺跡は木津川左岸の丘陵地に近い扇状地に立地します。調査の結果、一辺約5mを測る平面形が隅丸方形の縄文時代中期の竪穴式住居跡を1基と20数基の土坑群を検出しました。住居跡は壁に沿って溝が巡り、建て替えも行われていました。支柱穴が4か所あり、床面の中央やや北側に炉が設けられていました。この炉跡は底面に粘土を貼り付け、その上に礫が散乱する状態でした。礫の中には、石皿も転用され、粘土・礫とも強い熱で赤変していました。また住居跡の南側には土坑群が広がり、その中の一つからは縄文時代中期後半の深鉢や浅鉢、石匙や石皿、磨石・叩石などの石器がまとまって出土し、当時の生活を彷彿とさせるものでした。

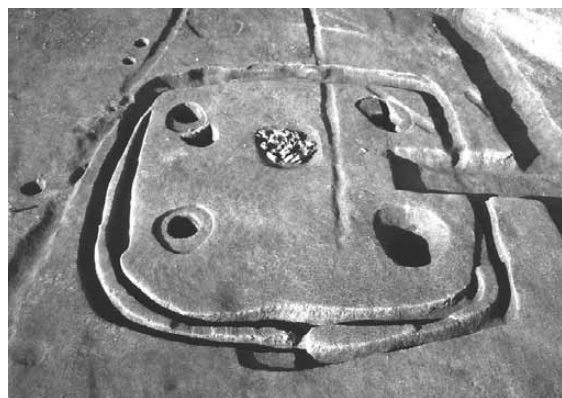
また、住居跡を確認した地点から北に約250mの場所には、縄文時代後期前半の土器や石器を含む流路跡があり、ここから近畿地方において最大級となる大型石棒1点が出土しました。この石棒は折れていますが、頭部の笠が2段に作られ、頭部と軸部合わせて30.5cmが残っています。軸部の直径が17.5cmあり、その大きさや形態は、京都府綾部市の葛礼本神社に奉納され、今も脇社の御神体として奉られている石棒に類似しています。神社の石棒はほぼ完形品で、全長は104cmを測ります。頭部が2段に作られる石棒は、兵庫県豊岡市竹野町見蔵岡遺跡で製作されており、但馬地域に同様の類例が集中する傾向が見られます。また、この石棒を用いて具体的にどのような祭祀が行われたのかは不明で

すが、ムラの広場に石棒を立て、自然からの食物の恵みへの感謝と子孫の繁栄を祈念したマツリのシンボルだった可能性があります。

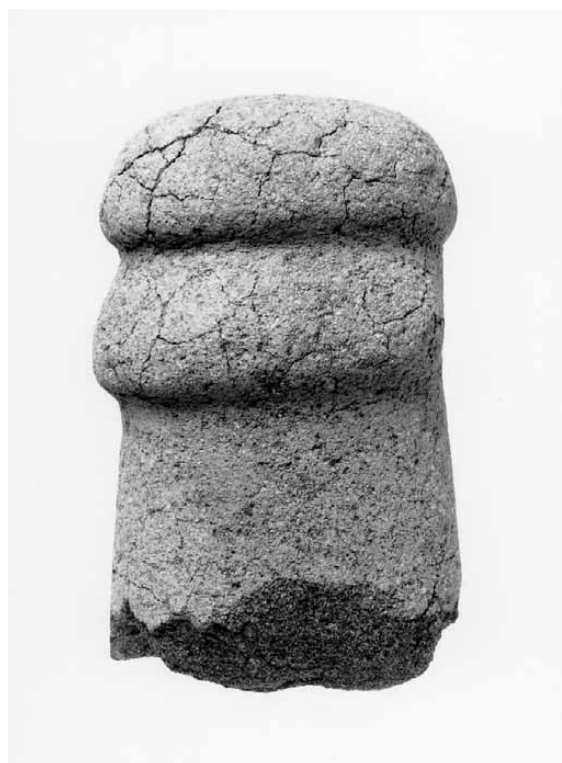
(柴 暁彦)



薪遺跡の縄文土器(中期)



竪穴式住居跡



石棒

三河宮ノ下遺跡の土偶

三河宮ノ下遺跡は、京都の北部を貫流し日本海に注ぐ由良川下流域の福知山市大江町三河高畠に所在します。遺跡は、縄文時代前期～晩期と古墳時代後期を中心とする集落遺跡で、縄文時代では円形の竪穴式住居跡・石囲い炉跡・配石遺構・柱穴跡などの遺構や、多くの土器に混じって土偶の頭部や耳飾・石製装飾品などが出土しました。土偶は、古墳時代の竪穴式住居跡内に混入していたため時期の特定ができませんが、縄文時代後期頃とみられます。

土偶の頭部はハート形で、幅4.8cm、高さ3.2cm、厚さ2.3cmを測ります。顔面には一続きの粘土を貼って盛り上げた鼻と眉が表現され、刺突によるおちょぼ口とやや吊上がった目が、顔の可愛さを引き立てています。頭部側面には粘土を貼り付けた耳があり、右耳は失われていますが、左耳には耳飾の痕跡とみられる刻みが施されています。

破損して出土することの多い土偶は、その目的や使用方法を限定できませんが、当時の人々が、なんらかの祈りや願いを込めた宗教的・呪術的なものだったと考えられています。

京都府内の土偶は、三河宮ノ下遺跡のほか、桑飼下遺跡（舞鶴市）、一乗寺向畑町遺跡（京都市）・高倉宮ノ下下層遺跡（京都市）・日野谷寺町遺跡（京都市）、雲の宮遺跡（長岡京市）の6遺跡で7例の出土が知られています。

同じ調査で出土した石製の装飾品も、飾りという以上の扱いをされていたようです。破損したり、磨り減ったものは、磨きなおし、穴を開け直して使われています。石材の中には、遠く新潟県の糸魚川付近からもたらされた翡翠製のものもあります。石製装飾品は比較的前期の遺跡に多く、舞鶴市浦入遺跡、志高遺跡、亀岡市千代川遺跡、京都市北白川小倉町遺跡などにあり、精華町椋ノ木遺跡からは、時期は不明ですが、硬玉製の犬珠が出土しています。

（竹原一彦）



土偶の顔



竪穴式住居跡



石製飾り類（三河宮ノ下遺跡ほか）

府内遺跡紹介

110. 芝ヶ原古墳

はじめに 芝ヶ原古墳は、京都府南部の城陽市寺田大谷に所在する古墳時代初頭の前方後方形の墳墓である(第1図)。芝ヶ原古墳は、城陽市東部の丘陵上に位置し、周辺には芝ヶ原古墳群をはじめ、下大谷古墳群、西山古墳群、上大谷古墳群、尼塚古墳群など、多数の古墳が所在していた。これらの古墳の多くは、昭和30年代後半から宅地開発が進んだ結果、発掘調査の多大な成果と引き替えに消滅してしまった。芝ヶ原古墳も、こうした宅地開発に伴い、その事前調査として昭和61年に発掘調査が実施された。調査の結果、古墳時代初頭の庄内式に位置づけられる墳墓であることが確認されたことから、現状保存が図られ、今日に至っている。

芝ヶ原古墳の調査 次に発掘調査の成果についてみてみたい。芝ヶ原古墳は、前方部が削平されていたものの、墳丘残存長21mの前方後方形を呈していることが明らかになった。墳丘には段築や葺き石は認められないが、周囲は周溝がめぐる。後方部には全長4.7m、幅2.5mの墓壇が存在し、中に組み合わせ式の木棺を直接、埋葬していたと考えられる。木棺内からは四獣形鏡1面、銅釦2点、硬玉製勾玉8点、碧玉製勾玉187点、ガラス製小玉1,276点、ヤリガンナ1点などが出土した。これらは、いずれも木棺の北小口付近からまとまって出土した。また、墓壇上面に礫敷が認められ、そこから供献土器が細片となって出土した。

芝ヶ原古墳の出土遺物で注目されるのは、四獣形鏡と銅釦、供献土器である。四獣形鏡は、内区に4個の乳を配し、その間に半肉彫りの獣形を配置する。外区には鋸歯文、複線波文、鋸歯文帯がめぐる。内区の獣形は、もとの形がわからないほど崩れているが、おそらく本来は竜虎を表

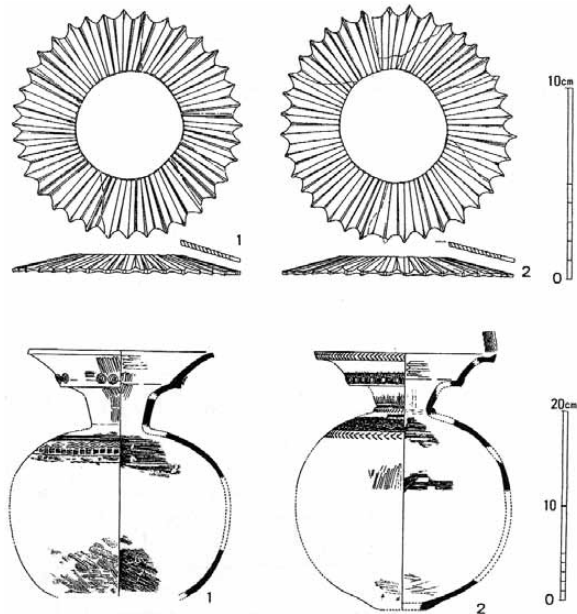


第1図 芝ヶ原古墳位置
(国土地理院 1/25,000 宇治)

していたと考えられる。直径12cm、仿製鏡である。銅釧は、同形同大の2点があり、同範と考えられる。古墳時代前期の副葬品として知られる車輪石と同形状を呈し、周縁部に36個の突起がみられる。最大径12.1cm、内径5.7cm、高さ1.0cmである(第2図上段)。これら四獣形鏡と銅釧は、形状や他の出土事例から、古墳時代前期後半から中期かけてのものと考えられていたが、墓壙上面で出土した土器は、それよりも古く、これらの遺物の年代を引き上げるものであった。

墓壙上面で出土した土器には、二重口縁壺4点、高杯1点がある。これらは細片化しており

完形に復原することはできなかった。しかし、土器の外面に円形竹管文や波状文、羽状文を施すなど、二重口縁壺を加飾することが盛行する段階のものであることが確認でき、古墳時代初頭の庄内式段階の土器であることが明らかになった(第2図下段)。



第2図 芝ヶ原古墳出土遺物実測図

芝ヶ原古墳の意義 芝ヶ原古墳は、墓壙上面から出土した土器から古墳時代初頭の庄内式併行期に位置づけられる。時期的には、南山城地域最古の古墳といわれている椿井大塚山古墳などに先行する。この時期の墳墓は、南山城地域に限定すると、芝ヶ原古墳のほか、城陽市長池古墳下層墳墓(墳形・規模等不明)、同上大谷6

号墳(方形、一辺15m)、木津川市加茂町砂原山墳丘墓(方形台状墓、25m)、同市坂上人ヶ平遺跡(方形周溝墓、7m×9m以上)などがある。一方、同時期の集落遺跡としては久御山町佐山遺跡や八幡市内里八丁遺跡などがある。南山城地域の墳墓は、まばらに存在し、集落遺跡とも大きく離れている場合が多い。この時期の墳墓の調査例は少なく、不明な点も多いが、芝ヶ原古墳は、墳形や墳丘規模などから、この時期の南山城地域の首長墓の中でも最も有力な首長の墓の1つと考えられる。

また、上述の墳墓群は、いずれも庄内式の中でも新しい段階のものと考えられ、南山城各地で、有力首長が並び立つような状態から、椿井大塚山古墳のように巨大な前方後円墳1基を築造するような首長に、どのような経緯でまとめられていったかについては、古墳出現前後の様々な問題と絡んで、南山城という地域における、これからの研究課題である。

なお、芝ヶ原古墳は国の史跡に、出土した四獣形鏡や銅釦は重要文化財に指定されている。

芝ヶ原古墳へは、近鉄「久津川駅」から東へ徒歩約10分。

(筒井崇史)

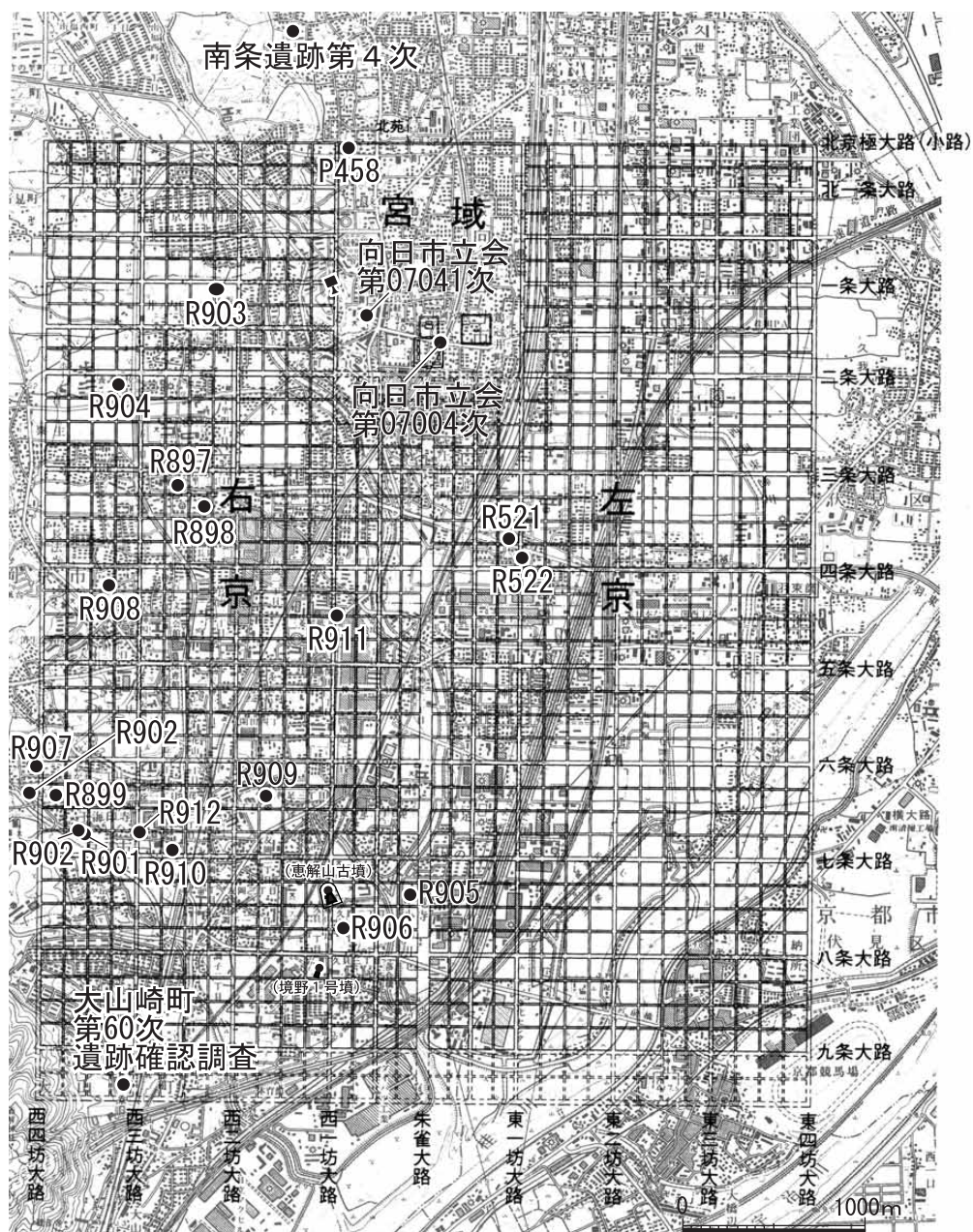
参考文献

城陽市教育委員会編『芝ヶ原古墳』(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第16集) 1987

長岡京跡調査だより・100

毎月1回、長岡京域で調査に携わっている機関が集まって長岡京連絡協議会を実施している。
平成19年5月から8月までの例会では、21件について報告があった。

報告地点を地図上に示し、顕著な成果が得られたものについてその概要を紹介する。



第1図 調査地位置図 (S=1/40,000)

(向日市文化財事務所・(財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復元図に加筆)

調査地はPが宮域、Rが右京城、Lが左京城を示し、数字は次数を示す。

宮域

宮域内の調査は、向日市立会第07041次のみである。

この調査では、大極殿院の西側で検出されていた南北方向の複廊の延長部とみられる遺構の一部が見つかった。文献に見える「西宮」の囲画施設の正確な位置が明らかとなった。

左京域

(財)向日市埋蔵文化財センターにより、隣接する地区で左京第521次と左京第522次調査が実施された。

左京第521次では、長岡京期の掘立柱建物跡・柵、平安時代の井戸など検出された。

左京第522次では、東一坊大路の東側溝を検出し、内部から平城宮式の瓦が出土した。

右京域

(財)長岡京市埋蔵文化財センターにより右京第897次・898次・899次・904次・905次・906次・907次・908次・911次・912次調査が実施された。

(財)京都市埋蔵文化財研究所により、右京第903次調査が実施された。

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターにより、右京第901次・902次・909次・910次調査が実施された。

これらの調査のうち、右京第901次・902次・910～912次は調査が継続中である。

主なものについて説明する。

右京第899次では、鎌倉時代の柱穴、平安時代の柱穴や溝、古墳時代後期の竪穴式住居跡4基・完全な形の土器が多数集積された土坑、縄文時代の配石遺構などが検出された。縄文時代早期の押型文土器が出土している。

右京第903次では、長岡京期の一条大路と西三坊坊間大路の交差点で条坊側溝とそれに平行する内溝、町内において掘立柱建物跡などが検出された。これらの下層で、縄文晩期と弥生前期の遺構面が確認され、土器棺墓などが検出されている。

右京第904次では、南北に軒を接する2棟の掘立柱建物跡が検出され、柱の抜き取り穴には瓦が多く埋められていた。古墳時代の掘立柱建物跡や竪穴式住居跡も検出されている。

右京第906次調査では、平安時代の掘立柱建物跡の柱列の検出とともに、緑釉陶器が多く出土した。

京域外

(財)向日市埋蔵文化財センターにより、中海道遺跡第67次及び、南条遺跡第4次調査が実施された。大山崎町教育委員会により、大山崎町第60次遺跡確認調査が実施された。南条遺跡では奈良時代の大型の掘立柱柱穴が検出されている。

(伊賀高弘)

センターの動向

(平成19年6月21日～9月)

1. できごと

- 6.21 京都府立亀岡高等学校時塚遺跡見学(参加者39名)
- 26 室橋遺跡第15次関係者説明会(南丹市、参加者21名)
- 27 長岡京連絡協議会(於：当センター)
国営亀岡調査関係臨時職員職場研修(参加者54名)
- 7.1 第107回埋蔵文化財セミナー(於：南丹市公民館、参加者90名)
 - 9 長岡京跡(長岡京市、乙訓高校)発掘調査開始
 - 10 笠置小学校6年生笠置山発掘調査見学(笠置町、参加者23名)
 - 12 小池久理事時塚遺跡視察
安全パトロール実施(谷奥古墳群、難波野遺跡)
 - 13 亀岡市川東小学校6年生馬路整理事務所見学(参加者47名)
小池久理事難波野遺跡視察
 - 17 井上満郎理事笠置山・鹿背山遺跡調査地指導
 - 18 市町村記念物保護行政担当者会議(於：京都府庁)
水谷壽克調査1課主幹、森正調査第2係長出席
 - 20 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(於：大阪市)
長谷川達調査第1課長、肥後弘幸調査第2課長出席
 - 25 長岡京連絡協議会(於：当センター)
 - 26 長岡京跡右京第910次(長岡京市)発掘調査開始
 - 27 笠置ふれあい体験クラブ笠置山調査地見学(参加者30名)
 - 30 鳥取小学校教職員谷奥古墳群調査地見学(参加者12名)
- 8.1 宮津城跡関係者説明会(参加者9名)
 - 4 難波野遺跡現地説明会(参加者54名)
 - 9 安全衛生基本セミナー(於：平安会館)
石井清司調査第2課課長補佐出席
 - 11 「第23回小さな展覧会」開催(於：向日市文化資料館)
- ～26 (入場者1,421名)
 - 14 文化庁清野孝之文化財調査官鹿背山瓦窯視察(木津川市)
 - 18 第108回埋蔵文化財セミナー(於：向日市民会館、参加者137名)
 - 20 増田富士雄理事難波野遺跡調査地指導

- 21 平成19年度史跡名勝笠置山発掘調査委員会(於：笠置町)
小池調査第1係長、伊野次席総括調査員出席
千束古墳群(京丹後市)発掘調査開始
- 22 理事協議会(於：当センター)
上田正昭理事長、中西和之常務理事・事務局長、石野博信、井上満郎
都出比呂志、中谷雅治、高橋誠一、上原真人、小池久各理事出席
- 23 長岡京連絡協議会(於：当センター)
平成19年度教育庁役付職員人権研修Ⅰ(於：京都市)杉江昌乃総務係長、
長谷川達調査第1課長、小山雅人総括調査員、岩松保主任調査員参加
- 26 「第23回小さな展覧会」終了(於：向日市文化資料館)(入場者1,421名)
- 29 平成19年度教育庁役付職員人権研修Ⅰ(於：京都市)
安田正人事務局次長、水谷壽克調査1課主幹、肥後弘幸調査第2課長
石井清司課長補佐、小池寛調査第1係長参加
野条・室橋遺跡第11次(南丹市、ほ場)関係者説明会(参加者10名)
- 30 長岡京跡右京第909次(長岡京市、乙訓高校)発掘調査終了(7.9～)
難波野遺跡(宮津市)発掘調査終了(6.12～)
宮津城跡(宮津市)発掘調査終了(5.28～)
乙訓高等学校2年生長岡京跡(校内)調査地見学(参加者147名)
- 9.1 第56回埋蔵文化財研究会(於：和歌山県)引原茂治主任調査員参加(～2)
- 9.2 笠置山現地説明会(笠置町、参加者170名)
 - 3 余部遺跡(亀岡市)発掘調査開始
 - 5 室橋遺跡第15次(南丹市、府道)発掘調査開始
 - 8 時塚遺跡現地説明会(亀岡市、参加者70名)
 - 10 京丹後市史編さん委員会(於：大阪市)肥後調査第2課長出席
 - 11 中尾芳治副理事長、上原真人理事鹿背山瓦窯跡、笠置山調査地指導
 - 13 中谷雅治、高橋誠一理事谷奥古墳群ほか調査地指導(～14)
野条・室橋遺跡(南丹市、ほ場)発掘調査終了(4.23～)
 - 18 石野博信、都出比呂志理事谷奥古墳群、時塚遺跡ほか調査地指導(～19)
 - 19 京丹後市鳥取小学校6年生谷奥古墳群調査地見学(参加者19名)
 - 20 亀岡市人権教育指導者研修会(於：亀岡市)
田代弘資料係長、小池寛調査第1係長参加
 - 26 長岡京連絡協議会(於：当センター)
 - 27 時塚遺跡(亀岡市)発掘調査終了(4.23～)

2. 普及啓発事業

7.1 第107回埋蔵文化財セミナー(於：南丹市八木公民館)

『丹波の後期古墳』

「丹波からみた古墳時代後期」細川康晴京都府教育庁文化財保護課主任

「南丹市の古墳の調査」辻健二郎南丹市教育委員会主任

「南丹市城谷口古墳群の調査」中川和哉当調査研究センター主任調査員

8.11 「第23回小さな展覧会」平成18年度発掘調査成果速報(於：向日市文化資料館)

～26 (入場者1,421名)

18 第108回埋蔵文化財セミナー(於：向日市民会館)

『平成18年度京都府内発掘調査成果から』

「古墳時代の土器を使った水辺のマツリー宮津市難波野遺跡」

引原茂治当調査研究センター主任調査員

「埴輪を用いた古墳のマツリー木津川市内田山B8号墳」

竹原一彦当調査研究センター主任調査員

「銀装の大刀と八角形墳―亀岡市国分古墳群」

筒井崇史当調査研究センター調査員



京丹後市谷奥古墳群で発掘体験
(京丹後市立鳥取小学校の生徒たち)

編集後記

情報104号が完成しましたのでお届けします。

本号では、平成19年度事業の抄報1編と略報5編、ベトナム陶器に関する論考のほか、寛治五年銘のある木簡に関する報告などを掲載しました。

新たに、「遺跡でたどる京都の歴史」の連載を始めました。初回は、縄文時代です。この連載は、主に当センターが調査した遺跡を取り上げ、時代順に紹介するものです。コラム風に構成してありますので、教材や普及啓発資料としても活用いただければ幸いです。

(編集担当 田代 弘)

京都府埋蔵文化財情報 第104号

平成19年11月30日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER